



卓球王国 2017年4月号掲載

平成28年度全日本卓球選手権 (報道+インタビュー)

- この【王国 e Book】は、月刊『卓球王国』2017年4月号掲載「平成28年度全日本卓球」報道ページ+優勝者インタビューページをPDF化し、卓球王国WEB「平成29年度全日本卓球」速報ページで公開したものです。
- 無料特別公開用ということで、本誌や有料「王国 e Book」と比べて写真の画質を落としていますが、ご容赦ください。
- 閲覧は、卓球王国WEB 全日本卓球速報ページでダウンロードされた方の個人的な利用に限らせていただきます。商用利用、複製したファイルの譲渡、販売、ネット等での配布を禁止します。PDFから一部のデータを抜き出したものについても同様です。
- 本ファイルの複製は原則禁止です。ただし、卓球王国WEB全日本卓球速報ページでダウンロードされた方の個人利用に限り、ご自身所有の複数の装置(パソコン、タブレット等)にコピーして閲覧することが可能です。
- お問い合わせは、卓球王国WEB「[お問い合わせ](#)」フォーム(トップページ画面左下の青字リンク)から、もしくは以下宛にお願い致します。

(株)卓球王国
電話 03-5365-1771

見開き表示の
右ページ

閲覧に際して

- PDF形式による電子書籍で、パソコンやタブレットなどでご覧いただけます。PDFの閲覧には、PDF閲覧ソフトをご使用ください。
- パソコンのモニターで閲覧する場合、ページ表示を「見開きページ」に設定すると、実際の冊子のように見開き表示されるので、見やすいでしょう。タブレットで閲覧する場合は、「単一ページ」のほうがサイズ的に見やすいでしょう。(ただしPDF閲覧ソフトによっては、「見開きページ」設定がないものもあります)
- 閲覧方法についての詳細は、卓球王国WEB「[王国e Bookについて](#)」をご参照ください。

見開き表示の
左ページ



『初優勝した時から狙っていた』 歴史を塗り変えた水谷隼 史上最多のV9達成



前

回大会で8度目の優勝を飾り、全日本選手権男子シングルの優勝回数で齋藤清に並んだ水谷隼。水谷にとって今大会は、新たな記録を樹立し、全日本の歴史を塗り変えるための舞台として重要な大会だった。これまでの水谷の全日本での戦い、そしてリオ五輪での活躍から、水谷の9度目の優勝を疑う声は聞こえなかった。

だが、リオで注目を集め、一躍時の人になった水谷は、テレビで見ない日がないほどメディアに登場した。卓球のメジャー化を唱え、自らその先頭に立ってテレビや雑誌の取材に応じたが、その代償は競技者にとって大きなものになっていた。

「毎日取材が続き、リオの後からはあまり練習ができなかった。12月のワールドツアー・グラントファイナルでは身体が動かなくて、このままではまずいと思いました」全日本前の1カ月間で「やるべきことはやった」という水谷。体重も落とし、今大会から採用された統一球（ボール）の打球感にも慣れると、そこで初めて「いけるな」という手応えを感じた。

そうして迎えた全日本、男子シングルスは波乱が続出した。

「組み合わせを見た時には、『今まで一番苦しいかな』と思いました。マークしていた選手たちがぼくに当たる前に負けて

いった。『自分が優勝に近づいているな』と感じていました」

準々決勝でジュニア2連覇の木造（愛工大名電高）を退け、準決勝で平野（協和発酵キリン）の猛攻をしのぐと、決勝では吉村（愛知工業大）の強打に1ゲーム目を落とし、相手の弱点を見つけると、そこから4ゲームを連取し、優勝を決めた。

9度目の天皇杯を手にし、最多優勝回数を更新した水谷だったが、マッチポイントを奪った直後のガッツポーズは、想像していたよりも小さかった。

「初優勝した時から9回の優勝は狙っていましたが、優勝を重ねるにつれて勝つことが当たり前だと思われるようになりました。（全日本は）ぼくにあってハイリスク・ノーリターンです。勝っても自分の中で盛り上がるものがないし、負けたら『テレビにたくさん出ていたから』と言われる。それでも勝たなければいけない。だから、今まで以上の喜びはないです」

強すぎる王者は、いつからか孤独で、孤高の道を歩まざるを得なくなった。

かつての優勝インタビューで、水谷はこう言った。「本気で、死ぬ気で全日本を狙っているのはぼくだけです」。

今大会の男子シングルスを振り返ると、あの時の水谷の言葉が蘇った。



ALL JAPAN

FINAL

MEN'S SINGLES

MEN'S SINGLES

FINAL

男子シングルス
MEN'S SINGLES

WINNER

Jun MIZUTANI

水谷 隼 Beacon LAB	9 11 11 13 11	4
吉村 和弘 愛知工業大	11 7 8 11 6	1

全日本卓球



4	FINAL	1
水谷 隼 beacon LAB	9 11 11 13 11	吉村 和弘 愛知工業大
	11 7 8 11 6	

● 水谷隼・初優勝からV9までの決勝戦スコア

- V1 2007年 ▶ 8、10、-6、6、5 VS 吉田海偉
- V2 2008年 ▶ -8、-9、7、6、7、-6、7 VS 吉田海偉
- V3 2009年 ▶ 9、7、8、-8、15 VS 松平健太
- V4 2010年 ▶ 4、10、7、8 VS 吉田海偉
- V5 2011年 ▶ 7、8、5、3 VS 張 一博
- V6 2014年 ▶ 9、4、4、-4、6 VS 町 飛鳥
- V7 2015年 ▶ 8、9、6、8 VS 神 巧也
- V8 2016年 ▶ -9、4、4、7、6 VS 張 一博
- V9 2017年 ▶ -9、7、8、11、6 VS 吉村和弘

男子シングルス

決勝

準決勝で訪れた窮地。 「だめか」と思われる展開から 勝機を見出せるのが水谷の強さだ

JUN MIZUTANI
MEN'S SINGLES SCORE

【水谷隼・男子シングルススコア】

4回戦	-10、4、5、3、4	vs 加藤悠二 (シチズン時計)
5回戦	8、4、7、7	vs 及川瑞基 (専修大)
6回戦	4、4、6、7	vs 緒方遼太郎 (EA/帝京)
準々決勝	8、-10、7、5、4	vs 木造勇人 (愛工大名電高)
準決勝	-9、-3、7、8、6、11	vs 平野友樹 (協和発酵キリン)
決勝	-9、7、8、11、6	vs 吉村和弘 (愛知工業大)



平野との準決勝では、ゲームカウントを0-2とリードされ、3ゲーム目もスコアが1-4になり、窮地に立ったがそこから逆転。「負けを覚悟したが、最後は気持ちで勝つことができた」(水谷)

9 度目の栄冠をかけて水谷隼が最後に戦うことになったのは、これまで全日本選手権でランキング入りしたことのない吉村和弘。リオ五輪の団体戦で日本代表としてともに戦い、男子初のメダルを獲得した吉村真晴の弟である。

「彼の試合は見えていなかった」と言う水谷だが、大会前に吉村の決勝進出を予測できた人はどれだけいたのだろうか。王者と伏兵との決勝が、6千人を超す観客の前で始まった。

1ゲーム目、水谷は0-5と出足で大きくリードを許す。吉村に緊張は見られず、臆することなく強烈なチキータをあげせる。3-7、3-9と点差は開いたままだったが、ここから水谷が5本連取して8-9まで追いついた。だが、追いつかれた吉村に動揺はなく、水谷はこのゲームを9-11で落とした。

2ゲーム目になると、水谷はチキータを封じるための伏線として、バック側にロングサーブを出したり、絶妙なハーフロングサーブも混ぜる。吉村はチキータが打てなくなり、水谷が11-7で取り返した。

3ゲーム目になると、水谷はサーブスに加えて、レシーブでも吉村を崩し始める。ストップレシーブを吉村のフォア前に集めて台上で崩すと、大きな展開の打ち合いになっても吉村のドライブをはね返した。この時点で試合は完全に水谷のものになっていた。

「吉村のチキータの威力は想像以上にすくなくて、とにかくそれを封じなく

てはいけないと思っていた」試合をしながらそう感じていたという水谷だったが、2ゲーム目以降はそのチキータの威力を半減させることに成功している。他の選手にはできなかったことが水谷にはできる。それは、豊富な経験と抜群の対応力から戦い方を模索しつつ、最善の戦術を見つけ出し、それをすぐに実行することができるという能力の賜物だ。それこそが、絶対王者・水谷の強さである。

4ゲーム目はジュースになり、10-10でサーブミスをした水谷だったが、それでも冷静さを失わず、13-11でこのゲームを奪うと、5ゲーム目はスタートダッシュをかけて10-7とマッチポイント。最後のポイントでドライブの引き合いで奪うと、両ひざを床につけてガッツポーズを決めた。

優勝後のインタビューと記者会見で、水谷が今大会を振り返った。

「準決勝では平野の出来が良く、負けを覚悟しました。でも、我慢を続けることでチャンスがきました。決勝も想像以上に厳しかった。ぼく自身は毎回ものすごくプレッシャーを感じながら全日本を戦っていて、ベストパフォーマンスはできていない。その中でもこうして勝ち続けられるというのは、ぼくと他の選手には圧倒的な差があるということだと思っています。もっと若い選手が強くなって、ぼくから優勝を奪い取ってほしい」
そう話す水谷の表情には、安堵と虚しさ

ALL JAPAN



水谷隼

[beacon.LAB・東京]

FINAL

MEN'S SINGLES



孤高の王者が
プレッシャーに打ち克つ
「ぼくと他の選手には、まだ
圧倒的な差がある」

男子シングルス

決勝

EA = JOC エリートアカデミー

もう「吉村の弟」とは呼ばせない。
ブンデスリーガで鍛えられた技と心
スパイクした黒豹・カズヒロが大暴れ!!



吉村和弘

【愛知工業大・愛知】



SEMI-FINAL	
4	3
吉村和弘 愛知工業大	吉田海偉 Global Athlete Project
11 8 8 6 11 11	4 11 11 11 7 7



3 回戦で濱川（日鉄住金物流）と戦っている吉村和弘を見て、「プレーに安定感が出てきているな」と感じた。

国内屈指の威力を誇るチキータと、打球点を譲らない大振りの両ハンド攻撃、それをどんな場面でも打つことができるところが魅力だったが、ミスの多さが目立つ選手。それが吉村和弘の印象だった。しかし、目の前のコートでプレーしている吉村には、以前のような、いらぬミスが減っていた。濱川に勝ち、4回戦に駒を進めた後に、「ミスが減って、プレーに余裕が感じられた」と告げると、こう返事が返ってきた。

「ドイツに行つて、いろいろなタイプの選手と練習や試合をするようになりました。ヨーロッパの選手は、日本の選手と違ってフォームもボールにも、クセのある選手が多いです。それに対応するために、自分がしっかりと打球するようになって、それが安定感につながっているのかもしれない」（吉村）

ブンデスリーグ2部でのプレーが2シーズン目に突入し、手応えをつかんで全日本のコートに立った吉村は、この後に誰もが予想していなかった快進撃を見せる。

4回戦でカットの村松（東京アーツ）を競り合いで下すと、5回戦では大島（ファースト）に勝って勢いに乗る中学3年の宇田（EA）の猛攻を凌いで初のランキング入り。「全日本のベスト16は高い壁だと思っていた」と試合後にコメントし

たが、ポテンシャルが解き放たれた黒豹は、目の前に現れる獲物に次々と襲いかかる。6回戦で前回3位の笠原（協和発酵キリン）、準々決勝で上田（協和発酵キリン）とのラリー戦に打ち勝ってベスト4入りを果たし、最終日に残った。

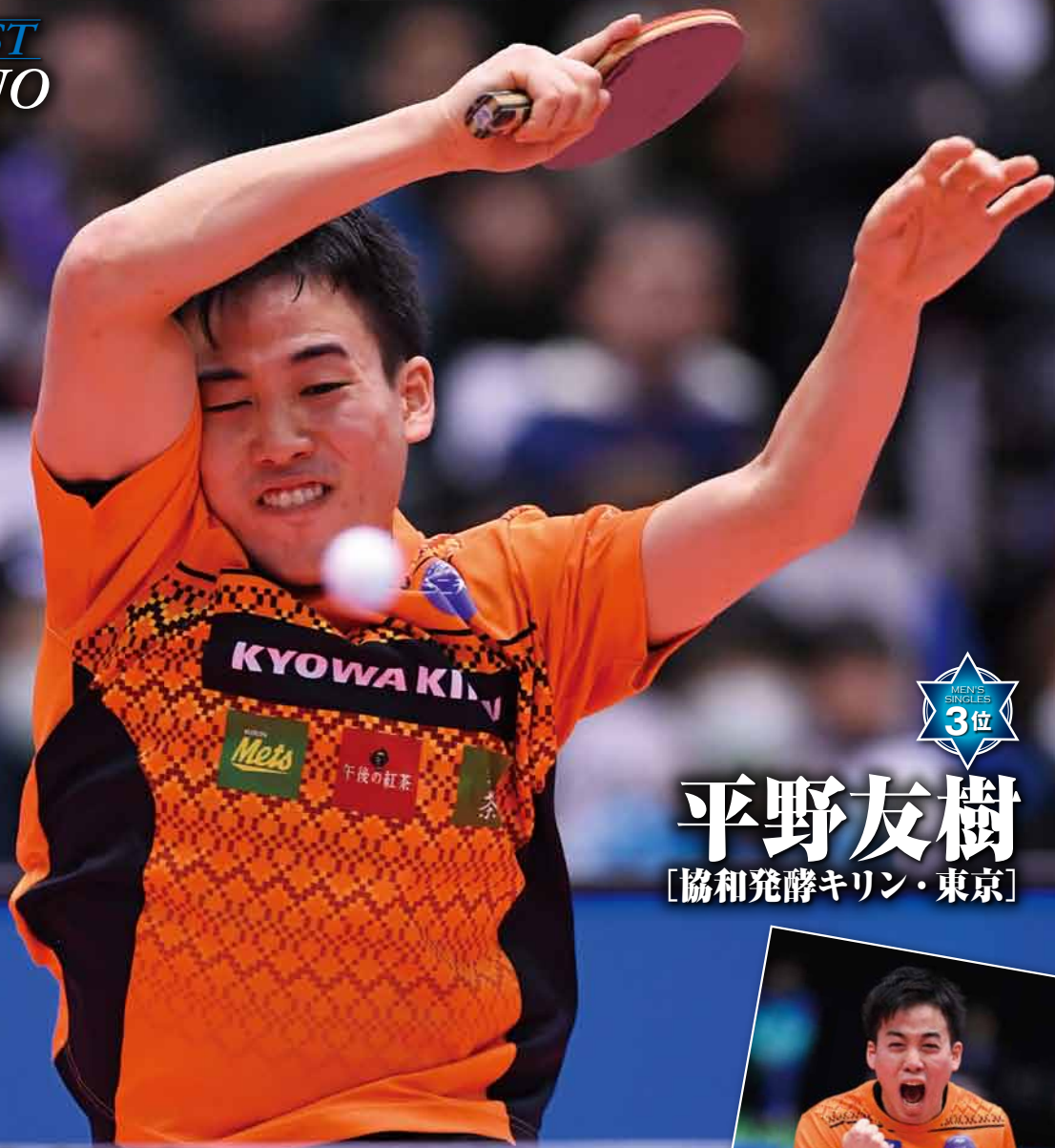
庄巻は準決勝の吉田戦で見せた逆転勝ち。ロビングで得点し、後陣からの逆襲を決めて派手なパフォーマンスをする吉田に1-3とゲームをリードされて、後がなくなった吉村だったが、その目は死んでいなかった。追い込まれていながらもプレーに乱れはなく、落ち着いていた。この試合をひっくり返した吉村は勝因を聞かれると、「集中力が途切れず、精神的な部分が良かった」とメンタル面の成長を挙げた。

決勝で水谷に挑んだ吉村は、強烈なチキータで得点を重ねて1ゲーム目を奪ったが、2ゲーム目以降は水谷の戦術転換についていくことができなかった。

「レシーブから積極的にチキータでしかけて、できるだけラリーにしないような戦術で取り組みましたが、水谷さんは徹底的に自分のフォア前を攻めてきて、そこを攻略することができなかった。実は水谷さんのほうがすごく上なので、立ち向かっていくだけでしたが、負ける悔しいです」（吉村）

敗れたとはいえ、吉村が今大会で見せたパワープレーには目を奪われた。日本人離れしたボールを放つ新たなスターの出現に会場が沸いた。

SEMI-FINAL	
4	2
水谷 隼	平野 友樹
beacon. LAB	協和発酵キリン
9	11
3	11
11	7
11	8
11	6
13	11



MEN'S SINGLES
3位

平野友樹
[協和発酵キリン・東京]



王者に挑んだ勇氣 覚醒したユウキが 初のベスト4入り!!

会

場に緊張感が漂ったのは、男子シングルス準決勝で平野友樹が水谷を相手に、1ゲーム目に続いて2ゲーム目も取った時だ。

「友樹はプレーに隙がなくて、あまり当たりたくない選手のひとりでした。1ゲーム目を取られてから頭が真っ白になってしまっ、とどんどん相手のペースになってしまった」(水谷)

平野は水谷のサーブを苦にせず、フォア側へ打たれたドライブをストレートへのカウンターで何本も抜き、バック側への攻撃に対してはフラットに叩くカウンターブロックで上から弾き返した。動きの速さでも水谷を上回り、3ゲーム目も出足で4-1とリードした。

ここで水谷のベンチがタイムアウトを要求。「このタイムアウトからガラツと流れが変わった」と水谷は振り返るが、ストロークを多用してきた水谷のプレーに平野が強打を封じられる。

「3ゲーム目の前半と4ゲーム目の前半にリードして、そこまでは自分に流れがあったと思いましたが、台上的駆け引きで足が止まってしまって、自分の特長を封じられた。勝負所の最後の場面で思い切ることができなかった。水谷さんは大事な場面でミスが少なく、駆け引きがうまい。リードしていても追い詰められている感じがして、すべてにおいてすごい一言です」(平野)

期待の張本(EA)を4回戦でストレートで下し、水谷にも迫った今大会。覚醒した平野が初の表彰台に立った。

MEN'S SINGLES
SEMI-FINALIST
Kaii YOSHIDA

SEMI-FINALISTS

MEN'S SINGLES



吉田海偉
[Global Athlete Project・埼玉]

若手の前に立ちはだかる偉大なベテラン 魅せる男・吉田海偉が 表彰台に返り咲く

前 回大会では、所属するグルジヨンツ（ポーランド）の試合と全日本が重なり、チームとの契約でヨーロッパチャンピオンズリーグに出場し、やむをえず棄権した吉田海偉。

今大会はノーシードからの出場になったが、平成16・17年度の王者は実力を発揮して3年ぶりに準決勝に進出した。

準決勝では、1ゲーム目は吉村にバックハンドを打ち込まれて落としたが、2ゲーム目からは攻められてもボディーワークを使ったフォアドライブで粘れるようになり、根負けした吉村にミスが目立ち始めた。吉田は3-1とゲームをリード。ベテランらしい老獪なプレーと戦術で決勝進出も見えたが、吉村の踏ん張りに最後は力尽きた。

「惜しかったけど、あと少しのところからが一番難しい。この試合が8試合目ということで、動くスタイルの自分としては正直疲れもありましたが、決勝で水谷とやりたくて最後まで頑張りました。今、35歳ですが気持ちには25歳。年齢は気にしないし、40歳までやりたい。普通の選手には負けないです」と試合後に話した。

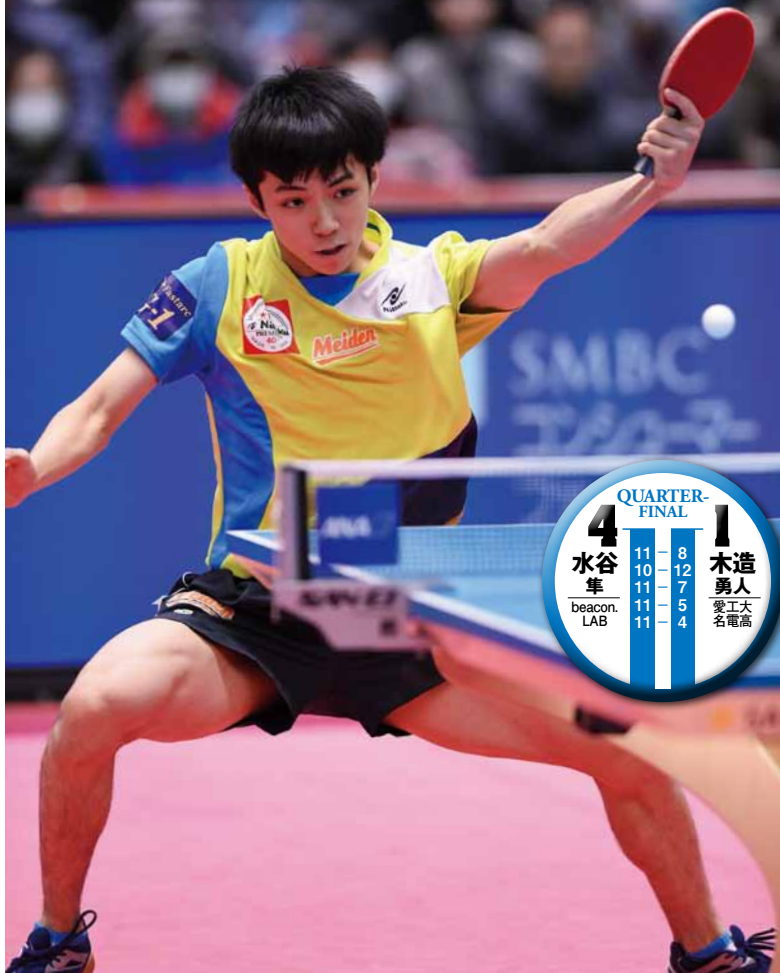


準決勝進出を決めて、ベンチコーチの妻、小西杏と抱き合う

男子シングルス

準決勝

Yuto KIZUKURI



QUARTER-FINAL	
4	1
水谷 隼	木造 勇人
beacon. LAB	愛工大名電高
11	8
10	12
11	7
11	5
11	4

才能を発揮した “もうひとりの天才” が シニアでも存在感を示す 木造勇人 [愛工大名電高・愛知]

ジュニア男子で2連覇を決め、男子ダブルスでも3位。男子シングルスでは初のランク入りでベスト8に入るなど、若手の中で抜群の成績をあげた木造。張本が話題に上がる中で、持ち前のボールセンスと試合運びのうまさに加えて、今大会では台上的攻撃力とラリー戦での打球に威力を見せるなど、成長をアピールした。水谷戦では、敗れはしたがリスキーな両ハンド攻撃で、2ゲーム目は互角に戦った。水谷は木造をこう評した。「サービスがうまかった。勝負所ですごく思い切ってこられたし、決まったと思うボールも返してきたので苦しかった。将来的に楽しみな選手だと思います」。



MEN'S SINGLES QUARTER-FINALISTS

男子シングルス《ベスト8》

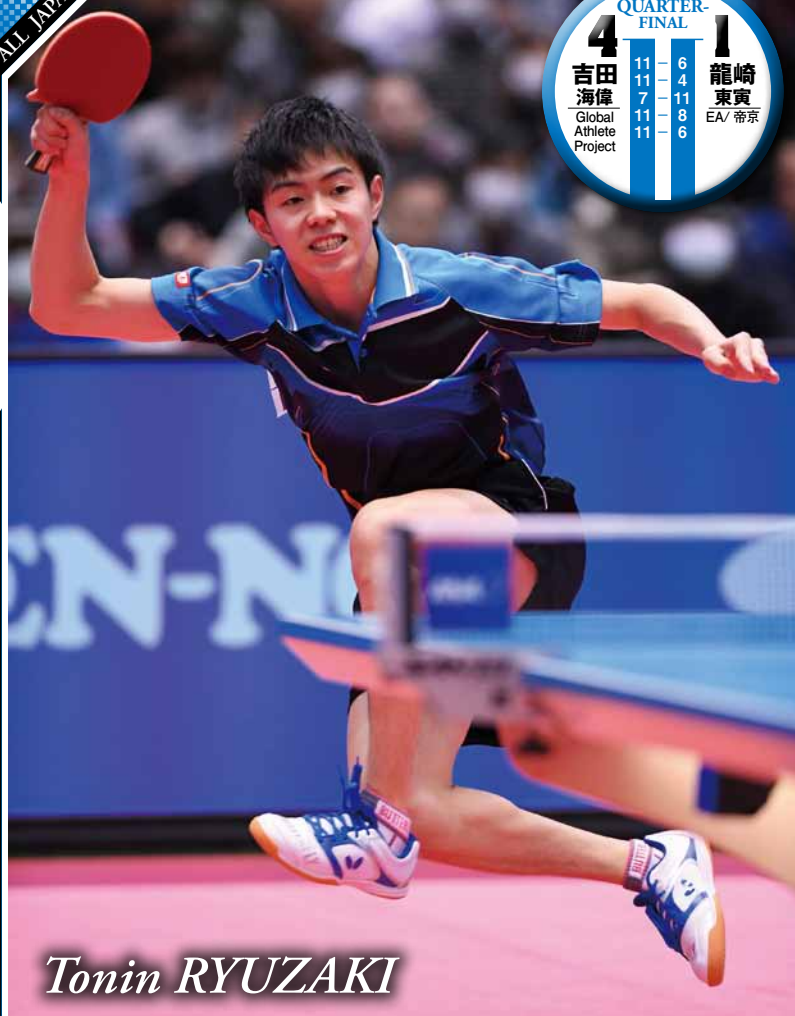
難敵の丹羽を破るも 吉村とのチキータ対決に敗れる 上田仁 [協和発酵キリン・東京]

全日本で過去に2度表彰台に立っている実力者の上田だが、今大会の組み合わせを見た時に上位進出は厳しいだろうと予想していた。その理由は、順当に勝ち進めば6回戦で丹羽(明治大)と対戦するからだ。上田は極度に丹羽を苦手とし、これまで圧倒的に分が悪い。「去年も丹羽に負けて、今回は本当に事前に対策を練って、いつもの戦い方だと全く歯が立たないので、違うことを徹底してやりました。それが効いて相手が崩れてくれた」と丹羽を下した上田。吉村との準々決勝では敗れたが、難敵を倒してのベスト8入りは上田にとって収穫となった。

QUARTER-FINAL	
4	2
吉村 和弘	上田 仁
愛知工業大	協和発酵キリン
8	11
11	8
9	11
11	9
11	6
11	7

Jin UEDA





Tonin RYUZAKI

QUARTER-FINAL	
4	1
吉田海偉	龍崎東寅
Global Athlete Project	EA/帝京
11 11 7 11 11	6 4 11 8 6

ノーマークの強さ。快進撃を見せた18歳の昇り龍 龍崎東寅

[JOC エリートアカデミー/帝京・東京]

ノースードからベスト8入りした龍崎。前回2位で4回戦で当たった張(東京アート)が「(龍崎戦は)特に何も考えていなくて、自分の力を出せばいいかなと思っていた」と言えば、5回戦で対戦した松平(協和発酵キリン)は「龍崎が同じゾーンにいることすらわからなかった」とコメントするなど、ノーマークの選手だった。しかし、サービスのうまさと弱点の少ないプレーで強豪を連破。「まだベスト8の力はないと思うので、これで満足せずにもっと強くなりたいです」(龍崎)。



神風、吹き荒れる。魂のフルスイングでベスト8入り 神巧也

[シチズン時計・東京]

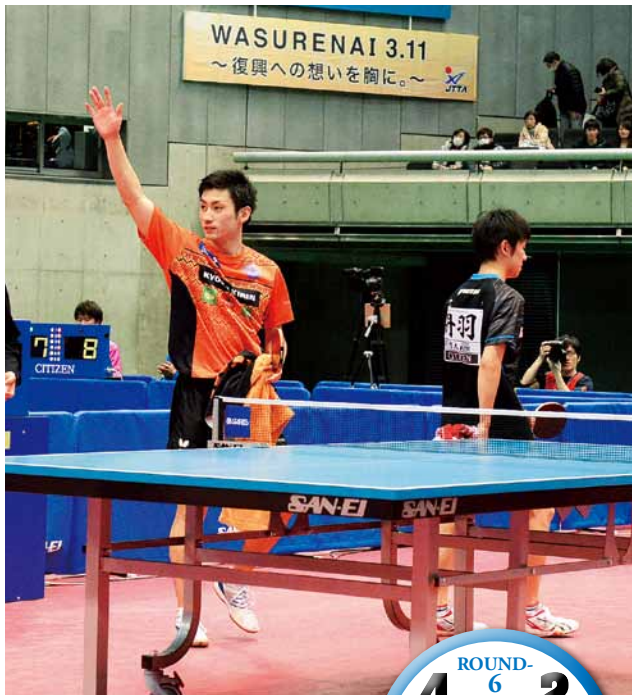
持ち前のガッツとフルスイングのドライブで、4回戦で有延(明治大)をゲームオール、5回戦で松下(日鉄住金物流)を4-2で下し、リオ五輪銀メダリストとして注目されていた吉村(名古屋ダイハツ)と6回戦で激突。「総合的な力は真晴のほうが上だと思いますが、ぼくはただ思い切って、持ち味のフォアハンドを使って逃げないで勝負することを心がけました」と神。

全日本という特別な舞台では、「思い切ってやりきる」というプレーができない選手が多い。神はそれができる選手であり、だからこそ競り合いをものにすることができた。準決勝をかけた平野との試合でも神のペースで進んでいたが、後半になってスタミナが切れた(下写真)。



Takuya JIN

QUARTER-FINAL	
4	3
平野友樹	神巧也
協和発酵キリン	シチズン時計
10 6 11 11 3 11 11	12 11 3 9 11 5 4



↑ 苦手とする丹羽との対戦がわかった時から「これまでにないほどしっかりと対策を練って試合に臨んだ」という上田。対する丹羽は「上田さんのプレーが良かった。自分のボールが狙ったところに入らず、それではこのレベルの選手に勝つのは難しい」と敗戦後に語った

ROUND-6	
4	2
上田 仁	丹羽 孝希
協和発酵 キリン	明治大
14	12
8	11
3	11
11	6
11	8
11	2

五輪メダリストを撃破!! 攻め抜いたジンタクが



ROUND-6	
4	2
神 巧也	吉村 真晴
シチズン 時計	名古屋 ダイヤハット
11	8
11	12
10	3
11	11
5	6
11	

↑ 吉村との試合では、バック対バックの展開を避けて、フォア対フォアの勝負に持ち込んだ神。その戦術が功を奏し、メダリストに快勝した

MEN'S SINGLES
ROUND-6
男子シングルス・6回戦〈ベスト8決定〉

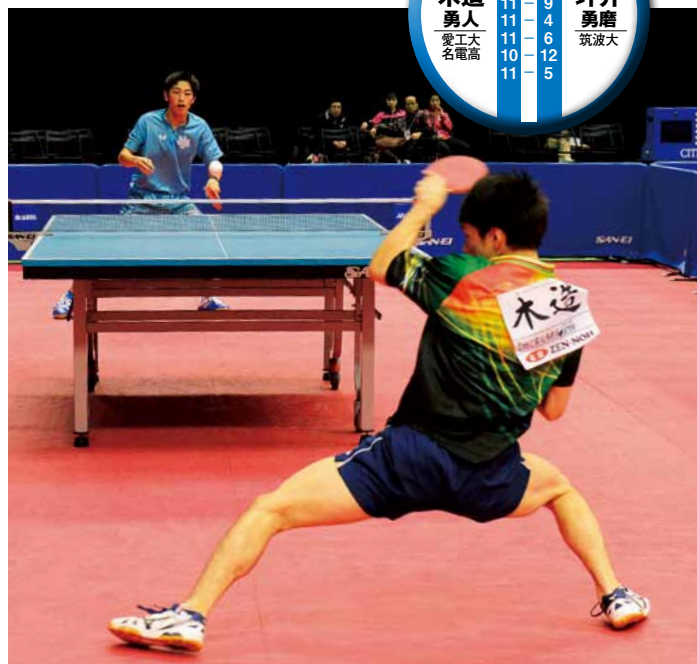
↓ ランク入りをかけた5回戦では固さが見られ、やや受け身になっていた吉村だったが、6回戦ではしなるような両ハンドドライブが火を噴いた。この試合から吉村が覚醒し、怒涛の快進撃がスタートした

初のランク入りを決めて
固さが消えたカズヒロ。
ここから進撃が始まった



ROUND-6	
4	1
吉村 和弘	笠原 弘光
愛知工業大	協和発酵 キリン
11	7
11	9
6	11
16	14
11	9

ROUND-6	
4	2
木造 勇人	坪井 勇磨
愛工大 名電高	筑波大
8	11
11	9
11	4
11	6
10	12
11	5



↑ 大学生の坪井と高校生の木造。好調のサウスボーが激突したこの試合は、木造に軍配が上がった。「木造には1年前の世界ジュニア選考会でゲームオール9-11で負けていて、その時よりも穴が少なくなり、やりづらかった」(坪井)

劇的な逆転で準々決勝に駒を進めた龍崎。 敗れた賢二はベンチで顔を覆う

ROUND-6
MEN'S SINGLES



↑ 第2シードの張を龍崎が破ったことにより、荒れ模様になったゾーン。ベスト8入りをかけた龍崎と松平の戦いは、松平が先に2ゲームを取り、そのまま一気に勝負を決めるかに思われたが……。『賢二さんはなんでもやってくるので最初は全然対応できませんでしたが、だんだん慣れてきて、最後は気持ちだと思っていました』（龍崎）。気持ちと気持ちのぶつかり合いは、若さを武器にした龍崎の勝利。敗戦後にベンチに戻った松平は、手で顔を覆（おお）って天を仰いだ



王者に一分の隙なし
水谷が緒方を一蹴



↑ キレのある両ハンド攻撃が武器の緒方だが、水谷はそれをシャットアウト。一方的な内容で王者の強さを見せつけた



↑ お互いにYG サービスが得意。レシーブでは碓塚のチキータにスピードがあり、一発で決めるシーンも多かったが、ラリー戦になると平野の得点シーンが目立つ。ラリーで勝てない碓塚のプレーがだんだんと荒くなると、そこからは完全に平野のペースになった



← カットマンを得意とする吉田に対して積極的に攻めた御内。「攻撃を7割くらいにして戦わないと勝てないと思っていましたが、4ゲーム目の競り合いを落としたのが痛かった」（御内）。『最近カットは打っていないけれど、ブラボールになってから（カットが）より打ちやすくなったので大丈夫でした』（吉田）



男子シングルス
6回戦



坪井勇磨

〔筑波大・茨城〕

↑ ランク決定の5回戦で松平(ホリプロ)に大逆転勝ちを収めた。「1ゲーム目は早い攻撃ができて取れましたが、その後は台から下げられて3ゲーム続けて取られました。5ゲーム目から吹っ切れて、また前でプレーできたので自分のペースに戻すことができました」(坪井)



松平賢二

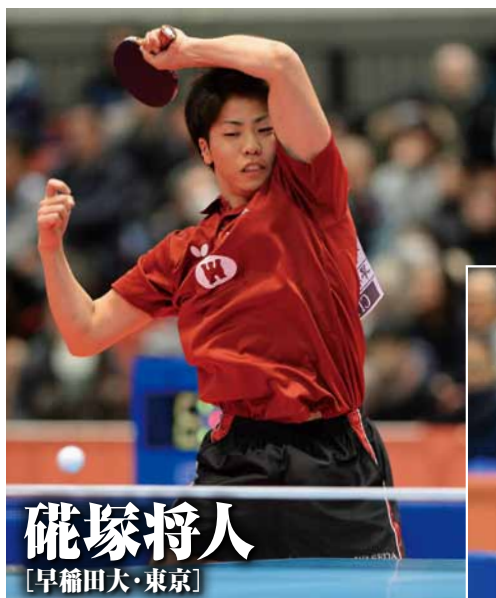
〔協和発酵キリン・東京〕

← マークしていたという吉田(愛知工業大)をストレートで下し、第2シードの張も敗れたことで上位進出が期待された松平だったが、ゲームカウントを3-1とリードしながら龍崎に逆転負け。「龍崎がどんな卓球をするかもほとんどわからなかった。勝っていただけにもったいない」(松平)

MEN'S SINGLES BEST-16

男子シングルス〈ベスト16〉

↓ プラボールになって不利と言われているカットマンで唯一のランク入りを果たした御内。カットだけではなく、攻撃力が高いのがこの選手の魅力だ。「ベスト16は1度入っているのもっと上に行きたかった」(御内)



碓塚将人

〔早稲田大・東京〕

↑ 5回戦で厚谷(信号器材)のカットを攻略し、初ランク。「去年はラン決で負けていて、今年は組み合わせも良かったので狙っていました。厚谷さんとの試合は、最後は「粘り強くやろう」と思いました」(碓塚)



丹羽孝希

〔明治大・東京〕

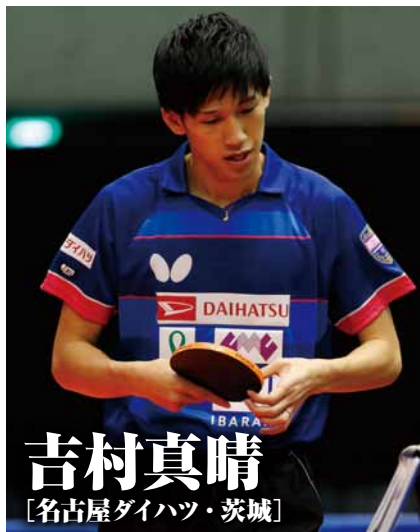
↑ 組み合わせを見た時は丹羽の決勝進出もあるかと見ていたが、6回戦で姿を消した。「ベスト16という成績には満足していませんが、今日の上田選手は強かった」(丹羽)



御内健太郎

〔シチズン時計・東京〕

↓ 長く腰を痛めており、満足な練習ができずに臨んだ今大会。5回戦で高見(愛工大名電高)の猛攻を退けたが、6回戦で吉村和の強打の前に敗退。前回の3位から大幅にランクダウンした



吉村真晴

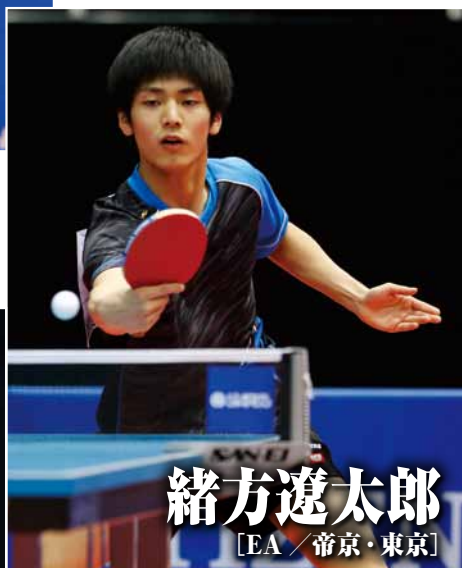
〔名古屋ダイハツ・茨城〕

↑ 前回3位の吉村はベスト16で終わる。「いい形で大会に臨みましたが神選手に流れがあったし、相手のプレーが良かった。計算違いという意味ではないのですが、自分の持ち味を出し切れなかった。国外で通じるプレーも、やり慣れている国内では通じない。これが今のぼくの弱さ。練習していかないといけない」(吉村)



笠原弘光

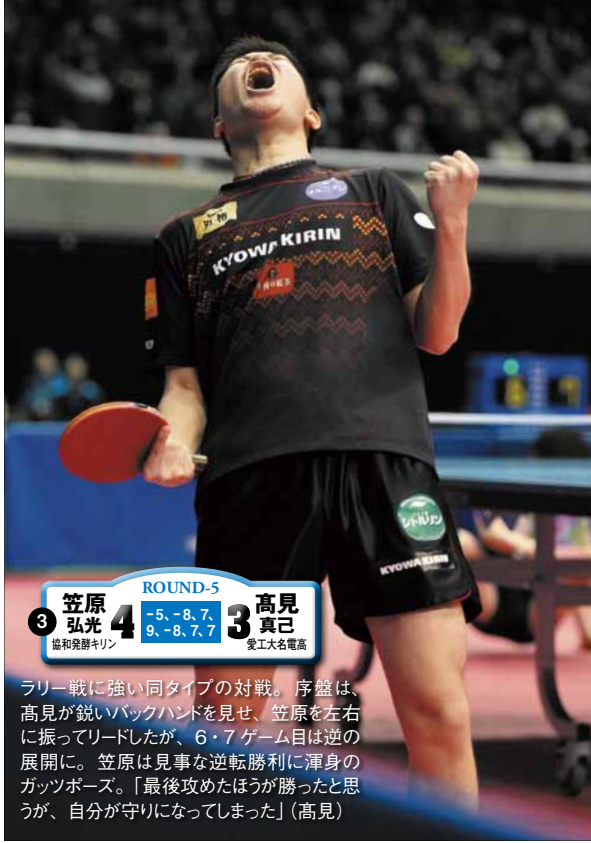
〔協和発酵キリン・東京〕



緒方遼太郎

〔EA/帝京・東京〕

↑ ドイツで一緒に練習している森菌(明治大)に勝って初めてランクに入ったが、水谷にはいいところなく完敗。「すべてにおいて相手の上だったので歯が立たなかった。水谷さんとは練習では何回か試合してもらいましたが公式戦では初めて。練習の時と戦術が全然違うので良い戦い方ができませんでした」(緒方)



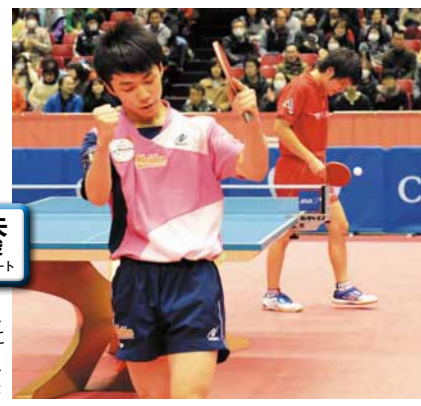
ROUND-5
3 笠原 弘光 **4** -5、-8、7、9、-8、7、7
協和発酵キリン
3 高見 真己 **0**
愛工大名電高

ラリー戦に強い同タイプの対戦。序盤は、高見が鋭いバックハンドを見せ、笠原を左右に振ってリードしたが、6・7ゲーム目は逆の展開に。笠原は見事な逆転勝利に渾身のガッツポーズ。「最後攻めたほうが勝ったと思うが、自分が守りになってしまった」（高見）



ROUND-5
初 吉村 和弘 **4** 6、-8、4、-6、9、-14、7
愛知工業大
3 宇田 幸矢 **0**
EA

↑ 大島(ファースト)を破り勢いに乗る宇田。緩急をつけたチキータなどで激戦を繰り広げたが惜敗。中陣から弾道の低い両ハンドを放つ吉村に対しては、ブロック主体になり巻き返せず。「前でプレーしようと思っていたが、思ったようにできなかった」（宇田）



ROUND-5
初 木造 真人 **4** 8、9、-6、4、-5、7
愛工大名電高
2 大矢 英俊 **0**
東京アート

→ 大矢が「先にフォアを攻められた」と語ったように、木造がチキータやフォアストレートへのドライブで積極的に大矢のフォアを突いた。バックは打球点が早い大矢も、フォアは打球点が下がり、ラリーで主導権を握れなかった



これぞカットマン! 豪打を拾いに拾い 自らも猛攻でランクを掴む

「過去に3回対戦して、1ゲームも取ったことがなかった」という御内に対して、戦術を変えて挑んだ上村。ミスの少ないバックを避け、フォア側を攻めて初めて1ゲーム目を取り、中盤までは2-1とリード。だが、ここから御内がカーブロングを交えたプレーで驚異的な粘りを見せて逆転。フルゲームまでもつれた接戦は、試合巧者の御内に軍配があがった



ROUND-5
2 平野 友樹 **4** 5、-5、-5、5、-9、11、7
協和発酵キリン
3 町 飛鳥 **0**
明治大

← 長いラリーの我慢対決。競り合いの中で、終盤平野がYGサービスを駆使して引き離れた。「最後にサービスが効いて、自分の展開に持ち込めた」（平野）

ROUND-5
2 御内 健太郎 **4** -9、6、-9、5、12、-8、5
シチズン時計
3 上村 慶哉 **0**
早稲田大

※スコア内、勝者横の数字は、ランク入りの通算回数

※ EA=JOCエリートアカデミー



ROUND-5
9 丹羽 孝希 **4** -8、5、10、5、8
明治大
1 軽部 隆介 **0**
シチズン時計

丹羽が明治大の先輩・軽部のフォアを突く戦術で速攻を封じた。「質の高いボールで、ミスを誘われた」（軽部）



ROUND-5
5 吉村 真晴 **4** -7、4、5、8、8
名古屋タイフ
1 宮川 昌大 **0**
野田学園中

当たっていた宮川が野田学園の先輩から1ゲーム先取。「自分の得意なパターンにさせてもらえなかった」（宮川）



ROUND-5
11 吉田 海偉 **4** 8、7、-8、6、6
Global Athlete Project
1 徳永 大輝 **0**
鹿児島県立体育会館

徳永がカウンターを決め3ゲーム目を奪う。「平日は夜11時から少しの練習でここまで来れたのはうれしい」（徳永）



ROUND-5
13 水谷 隼 **4** 8、4、7、7
beacon.LAB
0 及川 瑞基 **0**
専修大

充実したプレーで勝ち上がってきた及川だが、水谷の隙のないプレーに歯が立たず、3年連続ラン決で無念の敗退

咆哮、轟く。幕を開けた ジンタク劇場

5回戦屈指の激闘となった一戦。ラリー戦で押しまくる神が松下を圧倒して3ゲームを連取したが、諦めない松下が2ゲームを奪い返し、流れが移行したかに見えた。「あと1ゲームがほしくて受け身になってしまった」と振り返った神だったが、気力を振り絞ってフルスイングを続け、6ゲーム目はジュースで死闘に終止符。ランク入りを決めると雄叫びをあげ、2年ぶりの快進撃の幕開けとなった



ROUND-5

2 神 巧也 4 8, 7, 4, -9, -8, 13 シチズン時計

2 松下 海輝 日鉄住金物流

ラン決のドラマ

●ランク入り(ベスト16)をかけた5回戦、通称“ラン決”。例年、熱い戦いが繰り広げられるこのラウンドで、今年も16のドラマが展開された

MEN'S SINGLES

ROUND-5

男子シングルス・5回戦 (ベスト16決定)



ROUND-5

3 坪井 勇磨 4 10, -9, -4, -3, 9, 9, 7 筑波大

3 松平 健太 ホリプロ

坪井のチキータをカウンターで狙った松平が3-1とリード。しかし坪井が開き直って振ったバックカウンターが決まり出すと流れは逆転し、松平は戦術転換ができないまま無念の敗退。「世界選手権と全日本は別。この悔しさをバネにこれから頑張っていきたい」(松平)



ROUND-5

5 上田 仁 4 6, -11, 8, 4, 4 協和発酵キリン

1 塩野 真人 東京アート

↑塩野にとって最後のシングルの試合となった一戦。低くミスの少ないカットで、中盤までは互角に渡りあったが、上田は選球眼が抜群。塩野が反撃できない軽打を何本でも入れてチャンスをつかがい、カットが浮くと鋭いフォアドライブを叩き込んだ



ROUND-5

初 龍崎 東寅 4 5, -5, 9, 4, 4 EA/帝京

1 張 一博 東京アート

昨年準優勝の張に対し、3年前前の対戦では1-4で敗れていた龍崎だが、出足から攻撃的なプレーを貫いて快勝



ROUND-5

初 碓塚 将人 4 -5, 6, 8, -5, 10, 8 早稲田大

2 厚谷 武志 信号器材株

森田(シチズン時計)に勝利していた厚谷の攻守が冴えたが、碓塚が粘り勝ち。「トレーニング不足が最後に出た」(厚谷)



ROUND-5

9 松平 賢二 4 6, 10, 11, 11 協和発酵キリン

0 吉田 雅己 愛知工業大

パワーヒッター対決は、各ゲーム競りながらも松平がストレートで勝利。「自分に負けたという感じです」(吉田)



ROUND-5

初 緒方 速太郎 4 8, 6, 4, -4, 5 EA/帝京

1 高木 和卓 東京アート

緒方が5ゲーム目、9本連取で初ランク。8回のランク入りを誇る高木和は「チキータ処理が難しく、思ったより速かった」



4回戦きっての一番、
ケンタが激闘を制す

ROUND-4
松平健太 4 -8, 8, 9, -8, 11, -10, 10
岸川聖也 3
ホリプロ ファースト

↑松平のブロックとカウンター、岸川のしのぎと逆襲が火花を散らす。最終ゲーム、岸川が10-8でマッチポイントを握るも、松平がラケットの角に当てたカウンターが入るなど2連続ラッキーポイント。逆転勝利を決めた

MEN'S SINGLES
ROUND-4

男子シングルス・4回戦
〈スーパーシード初戦〉

張本にしたたかな洗礼。
平野が見せた
渾身の完封劇

一般での活躍が注目された張本だが、気合い満点で臨んだ平野が洗礼を浴びせた。「打たれることに怖さはなかった」という平野は、張本をブロックで振り回しつつ、フットワークを駆使してラリーで優位に立ち、鮮やかにストレート勝ち。ファイトを全面に出しつつも、冷静な戦術を貫いた平野の前に、張本の爆発力は陰をひそめた



ROUND-4
平野友樹 4 9, 7, 9, 12 0
張本智和
協和発酵キリン EA



◀宇田のチキータからの速攻に崩された大島。ラリーでも、宇田のフォアストレートへのドライブへの対応が遅れ、最後まで後手に回った。「もっともっと卓球と真剣に向き合わなければいけない」(大島)



◀好調・吉村和の豪打の前に村松が受け身に回り1-4で敗退。所属チームのドイツ・オクセンハウゼン会長の前で上位進出はならず。「年末にインフルエンザにかかり、体が思うように動かなかった」(村松)

MEN'S SINGLES
男子シングルス〈ベスト32〉BEST-32





倉嶋洋介 [全日本男子監督]

**ボールへの慣れが勝敗を左右。
全日本の戦い方を熟知している水谷。
本気で優勝を狙う選手はいるのか。**

◆ 今大会からボールが統一球になり、パタフライの『G40+』が使用されたが、ボールへの慣れという部分で、国際大会を中心にしている選手と、国内大会をメインにしている選手との間に大きな差があったと感じた。

ナショナルチームの合宿に出て、ワールドツアーで海外をまわっている選手は、年間300日近くを紅双喜のボールで練習している。全日本に向けて、選手それぞれが『G40+』で練習したと思うが、松平健太（ホリプロ）、吉村真晴（名古屋タイハツ）、大島祐哉（ファースト）、森蘭政崇（明治大）といった国際大会を転戦している選手はボールへの対応力が今ひとつで、本来彼らを持つ力が発揮されないまま負けてしまった。もちろん、対戦相手のプレーが良かったということも感じているが、ボールへの慣れという差は大きかった。

もうひとつ感じたことはスーパーシードの選手たちの初戦の入り方と試合での戦い方。下から上がってくる選手は数試合やっているの場場の雰囲気にも慣れ、勢いもある。かたやスーパーシードの選手は初戦で緊張もあり、本来の力以上を出すどころか、マイナスのスタートになる。レベルの上がってきている全日本では、

下から勝ち上がる選手にも十分力があり、本来の力を出すことができなかったスーパーシード選手は次々と早いラウンドで姿を消した。

多くのスーパーシード選手たちが負ける中で、水谷隼（beacon・LAB）はしっかりと準備して、初戦、5回戦と危なげなく勝った。全日本の戦い方を熟知している水谷だが、全体を通して彼には「負けられない」というプレッシャーがあり、前述した選手たちと同じようにボールにも不慣れである。本来の力の6〜7割しか出せていないプレーであった。それでも優勝できるのは、全日本で勝つためのポイントをしつかりと押さえているからだ。

他の選手が、全日本という大会に呑み込まれて行く中で、水谷だけはメンタル面をコントロールできる。水谷の強さはメンタルだけではない。彼のすごいところは試合をしながら戦術を組み立てられることだ。相手の弱点をいち早く見抜き、それを試合の中で相手にヤマを張らせずに最後まで続けることができる。技術的な部分で素晴らしいの



●幅広い技術と戦術で9度目の優勝を手にした水谷。彼を脅かす選手は現れるのか

は、サーブの回転、コース、長さを変えて出し、どんなレシーブがきても瞬時に対応できる点だ。サーブの種類を増やすことはトップ選手であれば可能だが、そうすると相手のレシーブも様々なコースに散らばる。水谷は引き出しが多いのでそれに対応できるが、他の選手は自分の得意な展開を求めてしまう。この差は、とても大きい。

2位の吉村和弘（愛知工業大）は、世界でもトップレベルのバックハンド技術を持っている。今大会ではバックハンドとフォアハンドの連係がマッチしていた。今回のようなプレーが随時出せるようになれば、ポテンシャルは持っているので世界に近づけると思っている。

若手の中では木造勇人（愛工大名電高）の活躍が光った。台上やバックハンドで先手を取る技術がうまいので、フォアハンドの力強さがつけばもっと勝てるようになるだろう。

木造の他にもランキングに龍崎東寅（EA/帝京）、坪井勇磨（筑波大）、碓塚将人（早稲田大）、緒方遼太郎（EA/帝京）といった若い選手、新たな選手が出てくることは日本の卓球界にとって良いことだ。世代交代、新陳代謝が行われることで、中堅、ベテランの選手の刺激になり、より国内の競争意識が高まる。それによって日本全体のレベルアップに繋がり、層の厚い日本になっていく。

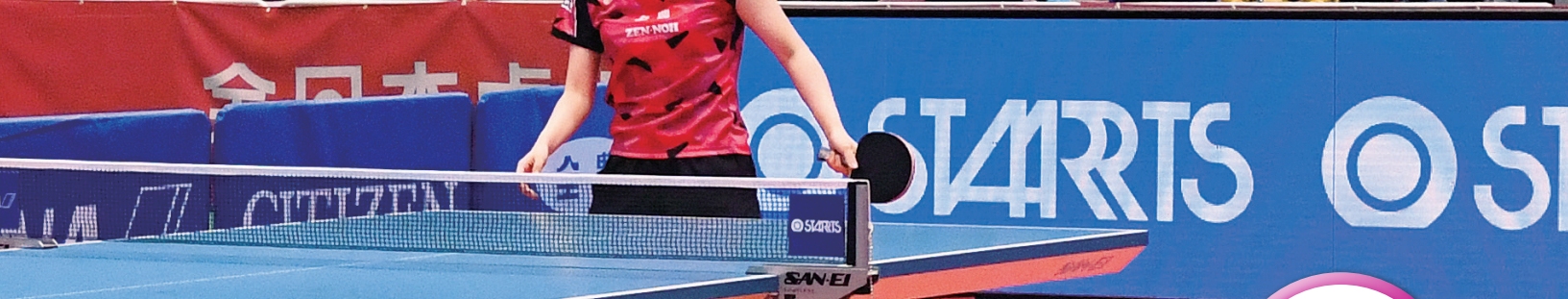
大会を見終えて感じたことは、水谷以外に本気で全日本を獲ろうと思っている選手がどれだけののだろうか、ということだ。全日本チャンピオンになるためには水谷を倒さなければいけない。それなのに、彼に対する戦術、その他の研究を本気で考えている選手がどれだけののだろうか。

全日本は選手にとって特別な大会だ。水谷は実力はもちろんだが、全日本という大会に愛されている。それは彼が全日本を誰よりも良く知り、大切に思っているからだと感じている。

ジュニア男子は、愛工大名電高の選手がベスト4に3人入った。木造、高見真己（愛工大名電高）に引つ張られてチームメイトも強くなっていると感じた。その中で木造は王者らしく、自信を持ってプレーができていた。

の史上最年少

V



FINAL

4 平野 美宇 EA / 大原学園	2 石川 佳純 全農
11 12 8 11 9 11	6 10 11 9 11 6

速い！ 強い！ 美宇は誰にも 止められない！

女

子シングルス決勝、1ゲーム目の0-10、ラブオール。

昨年の決勝で石川佳純に敗れ、雪辱に燃える平野美宇は、この出足に懸けていた。「去年は出足がすごく悪かったので、その反省を生かしました」（平野）。台からワンバウンドで出た石川佳純のハーフロングサーブをすかさずフォアで攻め、次の一本はフォア前のサーブを強く払って、鮮やかなレシーブエース。相撲の立ち合いで言えば、頭から思い切りぶつかった平野の「当たり勝ち」。昨年は同じ1ゲーム目のラブオールで、石川がレシーブから回り込んでバックストレートに打ち抜き、一撃で試合の主導権を掌握した。しかし、今年は逆。右利きのフォア前とハーフロングのサーブから3球目攻撃を狙う石川は、最初の2本で完全に出鼻をくじかれた。

逆に平野は、スイングやフェイクモーションを工夫してきた巻き込みサーブが非常によく効く。「自分はサーブで1点しか取れず、相手にサーブで2点取られることが多かった。劣勢が続いて苦しくなった」（石川）。石川はサーブからの得点率が下がったことで、レシーブも確実に入れるプレーが目立った。

そしてラリーになれば、平野は石川のフォアサイドを切る高速バックドライブを連発。6回戦で左腕の前田（日本生命）に「バックハンドが全然取れなかった」と言わしめた「サウスポー殺し」の攻めだ。石川も平野のフォアサイドにボールを集め、粘り強くバックハンドで返球するが、流れを引き戻せない。

FINAL

女子シングルス

衝撃

FINAL

WOMEN'S SINGLES



初優勝を決め、ベンチの中澤鋭コーチと抱き合う平野

女子シングルス

決勝

しかし、5ゲーム目、石川に千載一遇のチャンスが訪れる。1-2から7点連取で8-2と平野が大量リード。初優勝まであと3点という場面で、「優勝がちらついてしまった」と平野のメンタルが初めて揺れ動く。サーブのコントロールがあまくなり、レシーブから狙い打った石川が7点連取で大逆転。11-9で絶体絶命のピンチを脱する。

逆転勝ちの石川、ついに本領発揮か。しかし、「余計なことは考えず、1ゲーム目と同じように戦えばいい」とベンチの中澤鋭コーチにアドバイスを受けた平野は、再び「先手必勝」の速攻に徹した。「逃げるな、逃げるな」と心の中で唱え、6ゲーム目も6-1と突き放し、7-6まで挽回されながらも4点連取。一気に石川を押し切った。

優勝の瞬間、満面の笑顔で大きなガッツポーズを作った平野。「リオ五輪に出られなくてとても悔しかったので、絶対優勝したいと思っていた。自分から攻める卓球を心がけてきたので、最後まで貫きました。そういう卓球を教えてくださったコーチや周りの方々に感謝したいです」。優勝インタビューに答える時、勝って嬉し涙を流したことはないという平野の大きな眼に涙が浮かんでいた。

16歳9カ月での優勝は、88年度大会で優勝した佐藤利香（京浜女子商業高・当時）の17歳1カ月を抜く史上最年少記録。28年ぶりの記録更新で、平野美宇が全日本の歴史にその名を刻んだ。

WOMEN'S SINGLES
WINNER
Miu HIRANO

16歳の冬、
頂点へ**一直線**
「普通にやれば
勝てる」と思っていた」



平野美宇

[JOC エリートアカデミー/
大原学園・東京]

圧 巻の強さとはまさにこのこと。3
連覇中の絶対女王・石川から皇后
杯をもぎ取った平野美宇。

その実力もさることながら、決勝の5
ゲーム目に8-2から逆転を許しながら、
続く6ゲーム目も出足から得点を重ねた
メンタルの強さは非凡ひびんと云うほかない。

実は、大会の1カ月前に行われた世界
ジュニアでは彼女は不調だった。中国の
トップ級に胸を借りた中国スーパーリー
グの戦いから一転して、格下の選手が思
い切りぶつかってくる試合展開に戸惑
い、両ハンドの威力も落ちていた。「世界
ジュニアでは急に『感覚が良くない』と
言い出した」と中澤コーチは語る。

その不調からどうやって脱したのか。
中澤コーチがその秘密を明かす。「グラン
ドファイナルに移動してからの練習で少
しずつ調子を取り戻していきましたが、





← 昨年のジュニア準決勝で2-3で敗れていた橋本のカットを、パワーを増したフォアドライブで攻略

SEMI-FINAL

4	7	0
平野美宇	8	橋本帆乃香
EA / 大原学園	9	四天王寺高
11	12	11
11	9	11
11	8	11

「まず準決勝が勝負」 カットの橋本にリベンジ!

MIU HIRANO
WOMEN'S SINGLES SCORE
[平野美宇・女子シングルススコア]

4 回戦	4、6、9、5	VS 河村菜依 (アスモ)
5 回戦	8、4、4、4	VS 阿部恵 (サンリツ)
6 回戦	4、3、6、6	VS 前田美優 (日本生命)
準々決勝	7、9、-10、-10、9、6	VS 松澤菜里奈 (十六銀行)
準決勝	7、8、9、8	VS 橋本帆乃香 (四天王寺高)
決勝	6、10、-8、9、-9、6	VS 石川佳純 (全農)

→ 3年連続の対戦となった松澤戦、緩急(かんきゆう)をつけながらバック対バックの高速ラリーが展開されたが、最後は平野の速さが上回った



QUARTER-FINAL

4	7	2
平野美宇	9	松澤菜里奈
EA / 大原学園	12	十六銀行
11	10	9
11	12	6
11	11	11



磨き上げた宝刀 必殺サービス!

↑ 磨き上げた巻き込みサービス。優勝した女子ワールドカップの前から、大きく取るバックシングやフェイクモーションを磨いてきた

ズバッと!
美守語録

記者会見では、時にストレートな感情表現で報道陣を沸かせる場面も。これもチャンピオンの資質!?

Q 決勝の5ゲーム目を逆転されて、石川さん相手に気持ちひびるまなかったですか?

A それはいいです、そういう気持ちでやっていたら勝てないと思う。相手がすごい選手だとか、別にそんなに思わずに試合をしました。

Q 大会前から「優勝したい」と自分から積極的に言うようになったきっかけは?

A 前は強気なことは言っていなかったけど、スポーツ選手だから好感度とか気にしてダメだなと思って(笑)。試合に勝つのがスポーツ選手だから、嫌われてもいいと思って言うようにしています。



ほとんど足の指導しかしていない。(打球の)感覚が良くない時は、実は足から来るんです。重心の移動が良くなかったり、良い体勢を作れていない。

中澤コーチとともに1年以上取り組んできた、低い重心から威力あるドライブを連打するプレーへの進化。そこに生じたわずかなズレを修正し、平野は再び力強さを取り戻していった。

昨年のリオ五輪では、4番手のリザーブ(補欠)としてチームに帯同。代表入りを目指しながらチームの歓喜を目の当たりにし、練習相手としてサポートする辛い役目だ。しかし、それを経験することでプレーヤーとしてひと回り大きくなった。女子ワールドカップでの劇的な優勝で、中国スーパーリーグでもレギュラーの座をつかみ、ワールドツアーでは年に1回当たれるかどうかという丁寧や劉詩雯、朱雨玲らと対戦。国内大会では、速さなら誰にも負けないという自信が生まれた。決勝で対戦した石川は、この1年の平野の成長について聞かれた時、開口一番「自信をつけたこと」だと語っている。

リオ五輪という悔しさのどん底から、平野美宇は上昇気流に乗って高く高く羽ばたいた。この優勝が同じ「黄金世代」の伊藤や早田らを刺激し、さらなる成長を促すだろう。熾烈な競争の中に身を置きながらも、平野の思いは常にひとつ、日本のエースになること。「これから全日本チャンピオンなので、日本のエースと言われるように頑張っていきたい」と力強く語り、優勝会見を締めくくった。

WOMEN'S SINGLES
RUNNER-UP
Kasumi ISHIKAWA

4連覇を逃すも、 2-8で見せた 女王の意地



石川佳純
[全農・山口]

5 回戦で、高校の後輩である成本（同志社大）の異質速攻に2ゲームを先取されながらも逆転勝ち。そこから盤石の試合運びを見せ、決勝へ駒を進めた石川佳純。

4連覇は目前だったが、平野に敗れた決勝を振り返って『なんでこんなに攻められるんだろう』『どうしてこんなにうまくいかないんだろう』というのが常に頭の中にあっただと語った石川。それは中学生時代からバック強打の快音を響かせ、怖いもの知らずのプレーで勝利を重ねた石川に対し、年上の選手たちが抱いた感情ではなかったか。

技術面から見れば、やはりサービスのコントロールがあまくなり、優位に立てなかったことが大きく響いた。平野の積極的なレシーブの前に、低く出そう、短く出そうとするほどコントロールを失うのがサービスの怖さだ。

それでもゲームカウント1-3の5ゲーム目、敗戦の瀬戸際で見せた精神力はさすがだ。2-8でレシーブの構えに入った時、射るような鋭い眼差しは光を失っていなかった。「サービスが台から出るだろうと思ったので、それを狙っていった」と試合後に語ったとおり、積極的なレシーブで9-8とあっという間に逆転。6ゲーム目に力尽きたものの、「世紀の大逆転か」と満員の観衆をどよめかせた。

決勝後の会見で、平野のプレーを「150%くらいの力が出ているんじゃないかと思いました」と表現したのは女王のプライドゆえか。経験・実



積極レシーブに狂いが生じた……。封じられたサービス

決勝は出足で、平野の強烈なフォアフリックでのレシーブを浴びた石川。その後もサービスが高く浮く場面がしばしばあり、平野に狙い打たれた



SEMI-FINAL	
4	0
石川 佳純 全農	佐藤 瞳 ミキハウス
16 11 11 11	14 8 6 5

準決勝の佐藤戦は2-7から逆転した1ゲーム目が大きかった。序盤は正確なルードドライブで粘り、中盤からは強烈なパワードライブを交えて佐藤のカットを攻略



表彰式前の石川と平野。石川は優勝後の会見で「正直何が起こったかわからないみたいな感じで試合が終わった」とショックの大きさを語った

力ともに国内の第一人者であることに変わりはないが、バックハンドが強く、左利きのフォアサイドを速く厳しく攻められる平野のプレーを崩していくのは容易ではない。それは石川自身が一番よくわかっているだろう。

「これで負けて終わりではなくて、東京五輪に向けての道のりなので、今日はすごく良い勉強になりました。スッキリしたというか、これから挑戦者として同じ目線に立って競争できるので、しっかり反省してこれからの課題にしたい」。東京五輪というビッグゲームを目指すうえで、今回の敗戦は貴重な糧になるかもしれない。石川佳純の競技人生にいくつかの章があるとしたら、この全日本選手権から、また新たな章が始まるのだ。

WOMEN'S SINGLES
SEMI-FINALIST
Hitomi SATO

瞳に映る未来予想図。

進化を続ける19歳!



QUARTER-FINAL

4	2
佐藤 瞳	鈴木 李茄
ミキハウス	専修大
9 11 6 11 11 11	11 5 11 8 8 9



佐藤瞳

[ミキハウス・大阪]

2 年連続のベスト8から一步前進。一般に初出場した平成22年度大会から着実に成績を上げ、初の表彰台に立った佐藤瞳。

準決勝への道のりは苦しかった。4回戦でペンドライブ型の松村(アスモ)に3ゲームを先取されながら大逆転。ランク決定戦の牛嶋(日立化成)とのカット対決も、バック表ソフトの牛嶋に対してバック粒高の佐藤は変化をつけにくく、ゲームオールの辛勝だった。カットの基礎技術の高さと集中力で勝ち上がった。

準決勝は昨年の準々決勝で完敗した石川との再戦。試合前、カットから前に出てフォアストレートへのフォアドライブを繰り返し練習する姿があった。「相手が左利きなのでフォアを攻めることを意識していました。序盤は石川さんも様子を見ていたけど、途中から見切られて攻撃のチャンスが少なくなった」(佐藤)。5-10とスタートダッシュを懸け、ゲーム

ポイントを3回取った1ゲーム目を落としたのが響き、中盤から落ち着いてカットを攻められた。豊富なトレーニング量で守備範囲はさらに広くなり、攻撃力もついてきた。大会後に世界選手権個人戦での初の代表入りが発表。世界の舞台でも一段ずつ頂点への階段を登っていく。



熱戦となった準々決勝は、ネットインでの決着。粘る鈴木を振り切った

WOMEN'S SINGLES

SEMI-FINALIST

Honoka HASHIMOTO

対戦相手のカット打ちを狂わせたのは、バックから繰り出す変化サービスだ



SEMI-FINALISTS

WOMEN'S SINGLES



橋本帆乃香

[四天王寺高・大阪]

カットキラーを封じた大型チョッパー

帆乃香、驚異のセンス

♀

ブルスのパートナーである佐藤瞳が「静」なら、橋本帆乃香は「動」のカット型だ。「サービスや攻撃への展開がうまいし、私にないものをたくさん持っている。いつも刺激をもらっています」。1歳年上の佐藤は橋本をそう評する。

5回戦で市川（日立化成）を混乱に陥れたバックサービスは強力。6回戦では、巧みなルーブドライブからスマッシュを放つ安藤（専修大）に対し、序盤から攻撃を仕掛けて2ゲームを先取り、押し切った。いずれもカット打ちには定評のある選手だが、対カットの常識がこの橋本には通じない。準々決勝では愛知・卓伸くらブの先輩である石垣（日本生命）を破り、「目標にしていた選手なので、超えられたことはうれしい」と語った。

「自分の持っているものを全部出し切るしかない」という覚悟で臨んだ準決勝、昨年のジュニア準決勝で3-2で勝利していた平野には完敗。「安定感が増していたし、サービスが強化されていて、わかっけていても取れないサービスがあった」と年下のライバルの成長ぶりに脱帽した。

カットは低く正確。しかし粘るのではなく、最後は自分が両ハンドで攻撃し、決める形へ持っていく。高校生カットマンのベスト4入りは、86年度大会の内山京子（京浜女子商業高・当時）以来、30年ぶりの快挙。「後ろからでも攻撃していくパターンをもっと身につけたい」と準決勝後に語ったが、武揚（中国）のような強烈な回転の中陣ドライブが加わると面白い。

女子シングルス

準決勝

バックサービスと ストレートの強襲。 2回戦から快進撃 三宅菜津美

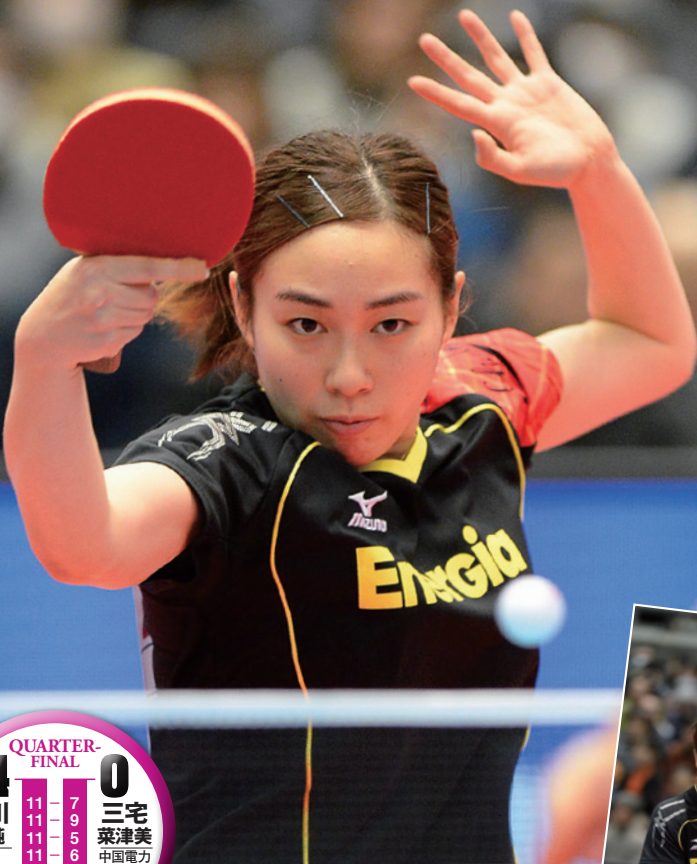
[中国電力・広島]

6年前の全日本ジュニアチャンピオンが、鮮やかなカムバック。中国電力に入社後、女子シングルスではランク決定戦に進めなかったが、今年は昨年4回戦で接戦の末に敗れた浜本（EA／大原学園）にランク決定戦で快勝。バックサービスで浜本のフォア前を突いて主導権を握った。準々決勝では石川にストレートで敗れたが、フォアストレートへのフォアドライブは切れ味鋭い。「去年ベスト64から今年はベスト8。すごい自信になりましたが、まだまだやるべきことは多いです」（三宅）。

WOMEN'S SINGLES

QUARTER-FINALISTS

女子シングルス〈ベスト8〉



Natsumi MIYAKE

→ 対戦相手のフォア前へバックサービスを正確にコントロールした



4回目の8強進出。 さらに速く動き、 もっと広く守る！

石垣優香 [日本生命・大阪]

6回戦で強打者の芝田（ミキハウス）に4-1で勝利。「この1年、継続的にトレーニングを積んできて、前は押されていたボールをしっかりと自分の力で入れられるようになった」とプレーの充実ぶりを語った石垣。準々決勝の橋本とのカット対決は、2ゲーム目の8-6で促進ルールに入ってから、橋本の攻撃力に手を焼いた。「相手はサービスから3球目、ツツキの変化からの攻撃がうまかった。最後まで自分に有利な展開にできなかった」とコメント。しかし、4回目のベスト8進出は見事な成績だ。

準々決勝では愛知・卓伸クラブの後輩である橋本に敗れた



Yuka ISHIGAKI





美宇に三度敗れるも
快速両ハンドで
大激戦を展開。

松澤茉莉奈

[十六銀行・岐阜]

観客も息を呑むバック対バックの攻防。6回戦で永尾(アスモ)との大激戦を制した松澤が、3年連続の対戦となる平野戦で好プレーを連発。平野の速攻をさらに狙い打つカウンター、巧みに弧線こうせんを操るバックハンドの緩急でゲームカウント2-2まで持ち込んだ。最後は平野の迷いのないプレーに押し切られたが、「今大会は調子あまり良くなくて、ここまで来られるとは思っていなかった。監督やスタッフのアドバイスのおかげです」と周囲への感謝を忘れなかった。



準々決勝の平野戦、息をもつかせぬバック対バックの攻防は見応えがあった

破ったぞ、ラン決の壁。
学生最後の冬、
ベスト8に躍進!

鈴木李茄 [専修大・東京]

大学生活最後の全日本で大躍進。塩見真(四天王寺高)とのゲームオール14-12という大激戦を制して初のランク入りを果たし、6回戦では昨年度3位の加藤杏(十六銀行)に快勝。「初のランク入りが目線で、それを達成できたから気持ちにも余裕がありました」と試合後に語った。

準々決勝は昨年ストレートで敗れた佐藤との再戦。強打のミスを連発した昨年の反省を生かし、巧みな緩急と前陣で振り抜くスマッシュで佐藤を追い込んだ。逆転負けを喫したが、大いにその存在をアピールした。



ランク決定戦で塩見真(四天王寺高)をゲームオール14-12で撃破

Rika SUZUKI





↓持ち前の強打をさらに厳しくカウンターされた森園。「しかたがないけど、もう少し上で当たってた」



一昨年の決勝の再戦。目覚めた闘争心 佳純、主導権譲らず。



前々回大会の決勝の再現となった石川対森園美咲戦。1ゲーム目の出足から強気で攻めた森園が4-0でリードしたが、これで石川にスイッチが入った。レシーブからの積極的な攻撃とカウンターであったという間に逆転し、11-7で先取。一気に3ゲームを連取し、森園は1ゲームを返すのがやっとだった。「森園さんは小学生時代からライバルとして、仲間として一緒に成長してきた相手。4-3で勝てればいいと思って準備していたけど、今回は思った以上に良いプレーができました」(石川)

WOMEN'S SINGLES ROUND-6 女子シングルス・6回戦〈ベスト8決定〉



↑⇨初のランク入りを果たした三宅と小道野(右写真)の同級生対決は、前陣でのバック対バックの攻防。ゲームカウント1-3から3-3に追いついた小道野が、最終ゲームも7-9から9-9に追いつく粘りを見せたが、最後はバックハンドにミスが出て及ばず



↑加藤の前陣での異質速攻を、鈴木がやや台から距離を取り、左右に揺さぶって下した。「点数の取り方がわからないまま終わってしまった。自分の得意な速いラリーで後ろに下がって対処されて、得点源が見つからない感じでした」(加藤)



「カットに勝つイメージがない」社会人女王・美月はベスト16



←佐藤から1ゲームを先取するも後が続かず、「自分がカットマンに勝てるイメージが全然浮かばない」とコメントした森園美月。カットマンという壁に対し、「常識どおりのカット打ちにこだわらず、自分だけのカット打ちを見つけていきたい」と前向きに語った



強豪クラブの先輩・後輩対決。攻めの姿勢を貫いた橋本に凱歌!

←愛知の強豪・卓伸クラブの先輩・後輩対決は、カット打ちに定評のある安藤に後輩の橋本が競り勝つ。橋本は積極的な攻撃で、安藤に落ち着いてカット打ちをさせなかった

ROUND-6

4	橋本帆乃香	9	安藤みなみ
	四天王寺高	6	専修大
	11 11 5 7 11 7 11		11 6 11 11 7 11 7



↑「カット打ちは全然やってこなかった。前半でリードできなかったのが負けにつながってしまった」と試合後の安藤



ROUND-6

4	平野美宇	4	前田美優
	EA/大原学園	3	日本生命
	11 11 11 11 11		6 6

↑前々回大会で平野に4-1で勝利した前田だが、今回は完敗。フォアサイドを切る平野のバックドライブに苦しんだ。「予想以上にツツキが切れていたし、相手のバックのボールが1本も取れなかった。バックからフォア側に厳しく攻められたボールの対策をやりたい」(前田)



ROUND-6

4	松澤茉里奈	12	永尾堯子
	十六銀行	8	アスモ
	10 11 8 12 6 11 11		11 10 11 7 9

↑最終ゲーム、リードを保った永尾が9-7として勝利まであと一歩だったが、松澤が4点連取。「レシーブでちょっと迷いがあり、力が入ってしまった。最後の最後で自分のミスが出てしまったのは力不足だと改めて感じました」(永尾)。急成長を見せる永尾、敗れたものの全日本の舞台上で貴重な教訓を得た



ROUND-6

4	石垣優香	8	芝田沙季
	日本生命	8	ミキハウス
	11 11 6 11 11 11		11 9 8

早田を破った強打者 芝田に6回戦の重圧

↑「最初から力みが出て、チャンスボールをつないでしまったり、ボールの見極めができていなかった」と試合後の芝田。自信があったはずの対カットに敗れ、ベンチに入った平野早矢香コーチのアドバイスに耳を傾ける(右写真)



←永尾戦を逆転で制し、松澤は観客席に向かって笑顔でガッツポーズ



前田美優
[日本生命・大阪]

↑ 世界選手権代表の加藤（吉祥寺卓球倶楽部）をゲームオール11-9で破った一戦は、5回戦屈指の好ゲーム。平野には前陣バックドライブでフォアサイドを突かれた



永尾堯子
[アスモ・静岡]

← 堂々たる体格で、両面に粘着性ラバーを貼った重量級ラケットから強烈なパワードライブを放つ。松澤戦は経験の差が出たが、期待の成長株だ

WOMEN'S SINGLES

BEST-16

女子シングルス〈ベスト16〉



森蘭美咲
[日立化成・東京]

↑ 田口（筑波大）との異質速攻対決に逆転勝ちしたが、石川戦は勝機をつかめず。24歳という年齢ながらベテランの域に入りつつあるが、「私くらいの年代の選手たちが若手の壁にならないといけない」と闘志は健在だ

↓ 軽快な両ハンド速攻で対戦相手を左右に振り回した。昨年初めてランク決定戦に進出し、今年は若宮（日本生命）を下してうれしい初ランク。さらなる成長に期待がかかる



小道野結
[アスモ・静岡]



芝田沙季
[ミキハウス・大阪]

↑ パワーに緻密さが加わり、国際大会でも実績を残す芝田。早田（希望が丘高）をノックアウトしたが、敗れた石垣戦は「普段もカット打ちの練習は結構しているので、ここで負けるのは悔しい」と振り返った



森蘭美月
[サンリツ・東京]

↑ 攻撃型には抜群に強い森蘭美月だが、対カットはまだ攻略法を確立できていなかった。「体力はまだ有り余っているけど、体力だけあってもダメ。対攻撃だけでなく、どの戦型とも戦えるようバランスを高めないといけない」

↓ 変化の激しいハイトスの巻き込みサーブ、変化系ソフトからのツッツキ・バックハンドを駆使しながら、ミートの強いフォアハンドで仕留める速攻型。5回戦で優勝候補の一角・伊藤（スターツ SC）の前に立ちはだかった



安藤みなみ
[専修大・東京]



加藤杏華
[十六銀行・岐阜]

↑ 前回3位の加藤は決定力に課題を残し、ベスト16。「去年は当たらなかったけど、勝ったことのない人もたくさんいる。今年は一戦一戦頑張る気持ちでした」

“黄金世代”^{ラン決}受難の5回戦。 手負いの早田の前に 芝田が立ちはだかる



ROUND-5
芝田 沙季 **4** -6, -5, 10, 7, -7, 8, 8
ミキハウス
早田 ひな **3**
希望が丘高

ひざと腕の痛みを押して試合に臨んだ早田は、ブロックと果敢なカウンターをうまく使い分け2ゲーム先取。しかし中盤から芝田のドライブが入り始めると、早田は決め急いでミスが出る。一進一退の打撃戦は最終ゲームまでもつれたが、終盤で芝田がエッジインのラッキーも味方につけて、苦手の早田から初勝利を上げた。「競った場面でも思い切ることができるようになったり、精神的にレベルアップはできた」(芝田)



ROUND-5
前田 美優 **4** -4, -6, 11, 9, -14, 10, 9
日本生命
加藤 美優 **3**
目黒学院高

前陣での速いラリーのシーソーゲームは最終ゲーム9オールまでもつれたが、前田が自分のサービスから2得点。息をするのが苦しいほどの激戦を制した。「勝負所で力んでミスしたのが勝負の分かれ道だった」(加藤)



ROUND-5
安藤 みなみ **4** -3, 9, -8, 7, 12, 6
専修大
伊藤 美誠 **2**
スターツSC

↑ 優勝候補の一角だった伊藤だが、自身と同タイプである異質速攻の安藤との打ち合いに無念の敗退。5ゲーム目の接戦が鍵となった。「市川さんと美宇ちゃんの対策をやってきたけど、もっとコツコツ1、2回目の相手の対策をやるべきだったかもしれない」(伊藤)

ラン決のドラマ

●スーパーシード選手にとって2戦目となるのが、“全日本ランカー”の称号をかけたこのラウンド。ドラマチックな16のバトルを紹介しよう

WOMEN'S SINGLES ROUND-5

女子シングルス・5回戦 (ベスト16決定)



ROUND-5
加藤 杏華 **4** 7, 5, 7, 9
十六銀行
田代 早紀 **0**
日本生命

高速ラリーが展開されたが、「今まで勝ったことがなかった」という田代に対し、バック対バックで優位に立った加藤が快勝



ROUND-5
石川 佳純 **4** -8, -7, 4, 9, 5, 7
全農
成本 綾海 **2**
同志社大

成本がバックのナックルをうまく使い2ゲーム先取。しかし石川が冷静にコース取りを変えて貫禄の逆転勝利



ROUND-5
橋本 帆乃香 **4** 7, 10, 9, 5
四天王寺高
市川 梓 **0**
日立化成

カットに強い市川だったが、橋本のサービスに苦しめられた。市川は6度目のラン決挑戦も及ばず悔しさをにじませた



ROUND-5
森園 美月 **4** 6, 7, 9, -8, 9
サンリツ
平野 容子 **1**
豊田自動織機

平野がサービスからの攻撃を仕掛けるも森園が緩急あるドライブで対応。最後は3球目を決め、初ランクにガッツポーズ

ROUND-5
 3 佐藤 瞳 4 6,-7,6,-9,-11,2,8 3 牛嶋 星羅
 ミキハウス 日立化成



促進ルールに入ったカット対決。前半は積極的に攻撃をしかけ、ミスも多かった佐藤だが、後半は粘りに粘っての勝利。惜敗の牛嶋は涙ながらに「今まで一度も勝ったことのない相手で、組み合わせを見た時から勝ちたいと思っていたのすごく悔しい」

ROUND-5
 6 森蘭 美咲 4 -6,-9,7,3,7,-6,6 3 田口 瑛美子
 日立化成 筑波大



◀序盤田口のサービスに苦しみ、ラリーでもフォアを突かれて劣勢だった森蘭だったが、中盤から持ち味のフォア強打が復活し接戦を乗り切った。金星を逃した田口は「2-0のリードから勝ちたいという気持ちが強くなって、攻める気持ちがなくなってしまった」



ROUND-5
 初 小道野 結 4 -3,10,9,-7,9,7 2 若宮 三紗子
 アスモ 日本生命

→全日本で過去8度のランク入りを果たしていた若宮。「悔いのない試合がしたかった。ランクに入って終われば良かったが及第点かな」(若宮)



壮絶すぎる打撃戦。最終ゲーム14-12で終止符



ROUND-5
 5 松澤 菜里奈 4 7,6,10,-7,11 1 森 さくら
 十六銀行 日本生命

◀準優勝した3年前以来のランク入りを狙った森(奥)だが、松澤とのパワー対決に押された。「この1年、人間的にも成長できてきたかなという試合だったので後悔はない」(森)

※スコア内、勝者横の数字は、ランク入りの通算回数

ROUND-5
 初 鈴木 李茄 4 -5,6,-3,-7,7,9,12 3 塩見 真希
 専修大 四天王寺高

↑鈴木(右)の両ハンドドライブ vs 塩見のフォア表異質速攻は、殴り合いのような激しい打撃戦に。前半は塩見ペースだったが、鈴木がうまく台との距離を取って次第にラリー戦をものにする。最終ゲームも一進一退で鈴木が先にマッチポイントを奪うが、塩見も12-11と再逆転。最後まで読めない展開だったが、鈴木が打ち切った。「最後に振り切れなかったのが悔しい」(塩見)



ROUND-5
 3 平野 美宇 4 8,4,4,4 0 阿部 恵
 EA/大原学園 サンリツ

最後の全日本も独自の変化攻守を出し切った阿部。「(平野の)ボールが煙を噴いていると思うくらい回転がかかっていた」



ROUND-5
 初 三宅 菜津美 4 6,9,5,-4,7 1 浜本 由惟
 中国電力 EA/大原学園

浜本がラリーでつなぐも、三宅が上から叩く。3ゲーム目が終わって浜本の目には涙も見られ、最後は力尽きた



ROUND-5
 初 永尾 堯子 4 7,-9,9,7,8 1 宋 恵佳
 アスモ 中国電力

永尾が3ゲーム目を接戦で奪うと、力強い両ハンドドライブで宋を台から下げ、有利な展開のまま押し切った



ROUND-5
 7 石垣 優香 4 7,11,3,2 0 打浪 優
 日本生命 新福藤子強大

石垣の攻守の前に完敗の打浪。「石垣さんはレベルがずっと上で、本当に自分が試合をやるのかという感じだった」

WOMEN'S SINGLES
ROUND-4
女子シングルス・4回戦
【スーパーシード初戦】



**ペンドラ松村の猛攻しのぎ
崖っぷちからの生還**

ループドライブでつなぎ、返球が高くなれば、スピードドライブとスマッシュで決める。松村がお手本とも言えるカット攻略で3ゲームを連取した。しかし4ゲーム目から佐藤が攻撃の割合を増やして逆転勝ち。劣勢を跳ね返す総合力の勝利だった

ROUND-4	松村夏海	3
4	佐藤瞳	1

松村 夏海 アスモ
佐藤 瞳 ミキハウス



ROUND-4
打浪優 4
2 天野優

5、-7、5、-7、9、5
7、9、5

天野 優 サンリツ
打浪 優 神戸国際女子学院大

→ 藤井 (愛媛銀行) のドライブ vs 安藤の速攻の真っ向勝負。藤井が3-1とリードするも安藤が鮮やかな逆転勝利



ROUND-4
安藤みなみ 4
3 藤井優子

-8、-4、5、-10、7、8、4

藤井 優子 愛媛銀行
安藤 みなみ 専修大

← 全日本一般初出場の打浪が天野 (サンリツ) を破る金星。波に乗れない天野に対し、得意のラリー戦に持ち込み、最後はパワーで押し切った

女子シングルス (ベスト32) **BEST-32**





馬場美香
[全日本女子監督]

自信に支えられた平野の積極的なプレー。 若手の選手たちは、「コンディショニング」の向上も重要

女子シングルスで史上最年少で制した平野美宇（EA／大原学園）のプレーは素晴らしい。晴らしかった。

決勝の石川佳純（全農）との一戦は、どちらが勝つにしても、もっと競る形になると予想していたが、平野のほうが向かっていく気持ちが強かった。昨年、決勝の出足でレシーブから先手を取った石川が、今年も後手に回ったのは、それだけ平野のプレーが積極性を増していたからだ。

その積極性を支えたのは自らのプレーに対する自信であり、気迫の源となっていたのはリオ五輪出場を逃した悔しさだろう。また、昨年石川との対戦を経験したことで、対石川の戦術もより明確になっていた。

プレースタイルの部分では、昨年よりフォアハンドの球威が増し、入れにいつていたボールも振り切つて攻められるようになった。バックハンドの回転量もさらに増し、国際大会では中国選手を詰まらせるくらい球威が出てきた。「絶対に一本欲しい」という勝負所で強気なプレーを貫けるのも彼女の長所だ。

今後はフォアハンドの打法により柔軟性を加え、あらゆるコースへ変化をつけたボールを打ち分けられるようにならばさらに強くなるだろう。他にも課題

はあるが、一気に課題を与えるのではなく、ひとつずつ克服していつてもらいたい。

2位の石川は、本来の技術力を発揮し、相手の戦術を理解したうえで冷静に戦つていけば、決勝は五分五分の勝負に持ち込めたはずだ。しかし、想像以上に平野のプレーの思い切りが良く、プレーが噛み合わないまま試合が進んでしまった感がある。

立ち向かってくる相手に対して、いかに苦しい場面に耐え、開き直つて挑戦者の気持ちで戦えるか。それは最終的には自身身の精神力にかかってくる。ただ、第5ゲームの2-8という絶体絶命の窮地から逆転したことは評価できる。石川はワールドツアーなどの国際大会でも、「この試合は厳しいだろう」という場面から底力を発揮して、逆転勝ちする場面をしばしば目にする。今回の決勝で見つかった課題も、今後への伸びしろと考えると、さらに伸びていくはずだ。

準決勝には佐藤瞳（ミキハウス）と橋本帆乃香（四天王寺高）というカット型が勝ち進んだ。カットの回転量が落ちると言われるプラボールで活躍できたのは、国際大会に積極的に参戦し、プレーを改良してきた努力の賜物だ。佐藤は以前よりも攻撃力が向上。橋本は「隙あらば攻撃」というスタイルで、今後はより精度の高いカットで攻撃のチャンスを増やしたい。ふたりともまだ若く、現代卓球にフィットした戦い方ができる選手たちだ。



●フォアハンドの球威が増す
●バックハンドの球威が増す
●フォアハンドの球威が増す
●バックハンドの球威が増す

一方、上位進出が期待された「黄金世代」と言われる10代の選手たち、伊藤美誠（スターツSC）、早田ひな（希望が丘高）、加藤美優（吉祥寺卓球倶楽部）がランク決定戦で敗れたのは、世界ジュニアからの連戦の疲労がひとつの原因だろう。若い選手はすべての試合をがむしゃらに頑張り、技術や精神力を磨きながら成長していく。しかし、次の段階としては試合前にメンタルをうまくコントロールし、試合

にに応じてベストのコンディションを作る「コンディショニング」が求められる。同時に、様々なプレースタイルの選手、年齢やランクが上の選手、下の選手と対戦する中で、確実に勝ち上がれる総合力を身につけたい。

伊藤に関しては、大舞台になるほど力を発揮する精神力が持ち味であり、多彩なテクニクを駆使する選手だが、時にプレーが単調になる異質型の弱点が出てしまった。全日本は紙一重の勝負。どの選手も本気で勝ちに来る中、誰が勝つかわからないというのを、今大会改めて感じた。その中で、2大会連続で決勝に進出した平野と石川が他の選手を一歩リードしていた。

強豪ひしめくジュニア女子を制した笹尾明日香（横浜準人高）は頑張りが光っていた。もともと闘志あふれるプレーをする選手だが、競つた場面でも冷静に自分のプレーを貫けたことが勝因だ。2位の長崎美柚（EA）も非常にポテンシャルの高い選手で、準決勝で早田を破つたことは大きな自信になるだろう。

今年は4月にアジア選手権、そして5月には世界選手権個人戦というビッグゲームが控えている。若い選手も多く代表に入り、2020年東京五輪に向けて強化を進めていく。経験を積む一方で、結果を残して自信をつけていくことも大切だ。

私も監督として、世界選手権という舞台で多くのものを吸収し、今後への糧にしていきたい。東京五輪でより良いゴールを迎えることができるよう、修正すべき点は修正していきたい。

※用具は全日本で使用したもの。出身校のあとの試合名のない戦績は、全日本のもの(年は年度表記)。R=Ranking EA=JOC エリートアカデミー
 ●ラケット(グリップ) ▲フォア面(表面)ラバー(厚さ) ★バック面(裏面)ラバー(厚さ) ※名前横の丸数字は、ランク入りの通算回数

R 4 Yuki Hirano **平野友樹** (2)



協和発酵キリン・東京/栃木県出身、24歳。明治大卒。12年ベスト8、15年混合複3位。16年全日本社会人3位。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/特注(ZLC/FL)
 ▲バタフライ/テナジー05(特厚)
 ★バタフライ/テナジー80(特厚)

R 3 Kaito Yoshida **吉田海偉** (11)



Global Athlete Project・埼玉/中国出身、35歳。青森短期大卒。04・05年優勝、06・07年準優勝、13年3位。13年ベラルーシオープン優勝。右P裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/吉田海偉
 ▲バタフライ/テナジー64(特厚)

R 2 Kazuhiro Yoshimura **吉村和弘** (初)



愛知工業大・愛知/茨城県出身、20歳。野田学園高卒。13年ジュニア優勝。16年全日学単ベスト16、複準優勝。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/張継科ALC(FL) ▲★バタフライ/テナジー05(特厚)

R 1 Jun Mizutani **水谷隼** (13)



beacon.LAB・東京/静岡県出身、27歳。明治大卒。06~10・13~15年優勝、06~09・11・15年複優勝。左S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/水谷隼ZLC(ST) ▲★バタフライ/テナジー80(特厚)

R 8 Yuto Kizukuri **木造勇人** (初)



愛工大大名電高・愛知/愛知県出身、17歳。愛工大附中卒。15年ジュニア優勝。16年インターハイ優勝。左S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/ティモボルALC(FL)
 ▲バタフライ/テナジー05(特厚)
 ★バタフライ/テナジー80(特厚)

R 7 Tonin Ryuzaki **龍崎東寅** (初)



EA/帝京・東京/新潟県出身、18歳。稲付中卒。12年全日本カデット14歳以下優勝。16年世界ジュニア複準優勝。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/インナーフォースZLC(FL)
 ▲★バタフライ/テナジー05(特厚)

R 6 Jin Ueda **上田仁** (5)



協和発酵キリン・東京/京都府出身、25歳。青森大卒。13年3位。13年ジャパンオープン複優勝。15・16年全日本社会人単・複優勝。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/インナーフォースZLC(FL)
 ▲★バタフライ/テナジー05(特厚)

R 5 Takuya Jin **神巧也** (2)



シチズン時計・東京/青森県出身、23歳。明治大卒。14年準優勝。11年全日学単・複優勝。15年全日本社会人3位。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●ヤサカ/ギャラクシャカーボン(FL) ▲★ヤサカ/ラクザX(特厚)

R 12 Yuma Tsuboi **坪井勇磨** (3)



筑波大・茨城/埼玉県出身、19歳。青森山田高卒。13年8位。14年インターハイ三冠。16年全日学ベスト8。左S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/インナーフォースZLC(FL)
 ▲バタフライ/テナジー05(特厚)
 ★バタフライ/テナジー80(特厚)

R 11 Maharu Yoshimura **吉村真晴** (5)



名古屋ダイハツ・茨城/茨城県出身、23歳。愛知工業大卒。11年優勝、14年混合複優勝、15年3位。15年世界選手権混合複準優勝。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/特注(ZLC/FL) ▲★バタフライ/テナジー05(特厚)

R 10 Koki Niwa **丹羽孝希** (9)



明治大・東京/北海道出身、22歳。青森山田高卒。12年単・複優勝、14年3位。16年全日学単・複優勝。16年全日学選抜優勝。左S裏・裏/ドライブ型。
 ●TSP/スワットパワー(FL) ▲★VICTAS/V>15 エキストラ(MAX)

R 9 Kenji Matsudaira **松平賢二** (9)



協和発酵キリン・東京/石川県出身、27歳。青森大卒。11年3位・混合複優勝。14年全日本社会人優勝。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/特注(7枚合板/FL)
 ▲バタフライ/テナジー05(特厚)
 ★バタフライ/テナジー80(特厚)

R 16 Ryotaro Ogata **緒方遼太郎** (初)



EA/帝京・東京/愛知県出身、18歳。稲付中卒。14年ジュニアベスト8、15年ジュニア準優勝。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●TSP/スワットパワー(FL)
 ▲★VICTAS/V>15 エキストラ(MAX)

R 15 Hiromitsu Kasahara **笠原弘光** (3)



協和発酵キリン・東京/静岡県出身、27歳。早稲田大卒。13年混合複3位。15年3位。10年全日学優勝。14・15年全日本社会人複3位。右S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/特注(ZLF/FL) ▲★バタフライ/テナジー05(特厚)

R 14 Kentaro Miuchi **御内健太郎** (2)



シチズン時計・東京/大阪府出身、27歳。早稲田大卒。13年13位。16年全日本社会人ベスト16。右S裏・粒/カット型。
 ●バタフライ/特注(5枚合板/ST)
 ▲バタフライ/テナジー05(特厚)
 ★TSP/カールP-1(特薄)

R 13 Masato Kakitsuka **碓塚将人** (初)



早稲田大・東京/熊本県出身、19歳。EA/帝京高卒。14年ジュニアベスト16。11年全日本カデット14歳以下3位。左S裏・裏/ドライブ型。
 ●バタフライ/アポロニアZLC(FL)
 ▲バタフライ/テナジー05(特厚)
 ★バタフライ/テナジー80(特厚)

※用具は全日本で使用したもの。出身校のあとの試合名のない戦績は、全日本のもの(年は年度表記)。R=Ranking EA=JOC エリートアカデミー
●ラケット(グリップ) ▲フォア面(表面)ラバー(厚さ) ★バック面(裏面)ラバー(厚さ) ※名前横の丸数字は、ランク入りの通算回数

R 4 Hitomi Sato
佐藤 瞳 (3)



ミキハウス・大阪/北海道出身、19歳。札幌大谷高卒。15年8位。16年クロアチアオープン優勝。右S裏・粒/カット型。●ニッタク/剛力スーパーカット(FL) ▲ニッタク/キョウヒョウ(特注) ★バタフライ/フェイントロングII(極薄)

R 3 Honoka Hashimoto
橋本 帆乃香 (初)



四天王寺高・大阪/愛知県出身、18歳。四天王寺羽曳丘中卒。16年インターハイ単準優勝・複優勝。右S裏・表/カット型。●ニッタク/剛力(FL) ▲VICTAS/V>15 エキストラ(2.0mm) ★ニッタク/ドナックル(極薄/特注)

R 2 Kasumi Ishikawa
石川 佳純 (11)



全農・山口/山口県出身、23歳。四天王寺高卒。10・13~15年優勝。左S裏・裏/ドライブ型。●バタフライ/インナーフォースレイヤー ALC(FL) ▲ニッタク/ファスターク G-1(特厚) ★バタフライ/テナジー-64(特厚)

R 1 Miu Hirano
平野 美宇 (3)



EA/大原学園・東京/山梨県出身、16歳。稲付中卒。15年準優勝。16年女子ワールドカップ優勝。右S裏・裏/ドライブ型。●スティガ/クリッパーウッド(FL) ▲バタフライ/テナジー-05(特厚) ★バタフライ/テナジー-64(特厚)

R 8 Natsumi Miyake
三宅 菜津美 (初)



中国電力・広島/香川県出身、23歳。就実高卒。10年ジュニア優勝。13年全日本社会人複3位。右S裏・表/前陣速攻型。●スティガ/クリッパー CC(FL) ▲バタフライ/テナジー-05(特厚) ★VICTAS/VO>102(2.0mm)

R 7 Yuka Ishigaki
石垣 優香 (7)



日本生命・大阪/愛知県出身、27歳。淑徳大卒。14年3位。15年15位。16年ブルガリアオープン優勝。右S裏・表/カット型。●ニッタク/キムギョニア(ST) ▲ニッタク/P12(2.0mm) ★ニッタク/閃霊(薄)

R 6 Marina Matsuzawa
松澤 茉里奈 (5)



十六銀行・岐阜/長野県出身、24歳。淑徳大卒→日立化成。12年3位。15年5位。15年全日本社会人ベスト8。右S裏・裏/ドライブ型。●バタフライ/劉詩雯(FL) ▲バタフライ/テナジー-05(特厚) ★VICTAS/V>15エキストラ(MAX)

R 5 Rika Suzuki
鈴木 李茄 (初)



専修大・東京/静岡県出身、22歳。青森山田高卒。13年全日学選抜優勝。15年全日学単・複優勝。左S裏・裏/ドライブ型。●バタフライ/インナーフォース ZLC(ST) ▲バタフライ/テナジー-05(特厚) ★バタフライ/テナジー-80(特厚)

R 12 Saki Shibata
芝田 沙季 (2)



ミキハウス・大阪/千葉県出身、19歳。四天王寺高卒。13年16位。15年インターハイ単複3位。右S裏・裏/ドライブ型。●スティガ/クリッパー CR WRB(FL) ▲VICTAS/V>15 エキストラ(MAX) ★ニッタク/ファスターク G-1(特厚)

R 11 Yui Odono
小道 野結 (初)



アスモ・静岡/神奈川県出身、23歳。早稲田大卒。14年全日学準優勝。15年全日学3位。右S裏・表/前陣速攻型。●ニッタク/アコースティック(FL) ▲ニッタク/ファスターク G-1(特厚) ★ニッタク/ハモンドFA(特厚)

R 10 Minami Ando
安藤 みなみ (初)



専修大・東京/愛知県出身、19歳。慶誠高卒。全日学選抜15年優勝・16年準優勝。右S裏・表/前陣速攻型。●バタフライ/福原愛プロ ZLF(FL) ▲バタフライ/テナジー-05(特厚) ★アームストロング/アタック8スーパーI Ver43° L粒(中)

R 9 Takako Nagao
永尾 堯子 (初)



アスモ・静岡/神奈川県出身、21歳。横浜隼人高卒。16年全日本社会人準優勝。左S裏・裏/ドライブ型。●スティガ/ローズウッド NCT V(FL) ▲ニッタク/キョウヒョウネオ3(特厚) ★L.D.T.T./EA777(特厚)

R 16 Miyu Maeda
前田 美優 (3)



日本生命・大阪/香川県出身、20歳。希望が丘高卒。14年3位、12・15年混合複優勝。16年全日本社会人3位。左S裏・表/前陣速攻型。●TSP/スワットパワー(FL) ▲バタフライ/テナジー-05(特厚) ★ニッタク/ハモンドFA(厚)

R 15 Misaki Morizono
森園 美咲 (6)



日立化成・東京/東京都出身、24歳。青森山田高卒。13年混合複優勝、14年準優勝。右S裏・表/前陣速攻型。●スティガ/クリッパー CR WRB(FL) ▲バタフライ/テナジー-05(特厚) ★ミズノ/ブースター EV(中)

R 14 Kyoka Kato
加藤 杏華 (3)



十六銀行・岐阜/岐阜県出身、20歳。県立岐阜商業高卒。13年8位、15年3位。16年全日本社会人3位。右S裏・表/前陣速攻型。●スティガ/クリッパーウッド(FL) ▲ニッタク/ファスターク G-1(特厚) ★ミズノ/ブースター SA(厚)

R 13 Mizuki Morizono
森園 美月 (初)



サンリツ・東京/愛媛県出身、20歳。四天王寺高卒。14年複準優勝。16年全日本社会人優勝。右S裏・裏/ドライブ型。●ニッタク/剛力(FL) ▲ニッタク/キョウヒョウネオ3(特厚) ★ニッタク/ファスターク C-1(特厚)



MEN'S DOUBLES
優勝

丹羽孝希 (奥)・酒井明日翔 [明治大・東京]

「大会前から優勝のチャンスはあると思っていた」(丹羽) との言葉どおり、レシーブからチキータでバンバン攻めた2人が初優勝を果たす。準決勝では「酒井のチキータが想像以上に強烈で、彼ひとりにかき乱された」(水谷) と語るほどの当たりを見せて前回優勝の水谷・吉田を粉碎。決勝でもフルゲームに追いつかれながらも、最終ゲームで驚異的なカウンターを連発して見事王座を射止めた。「酒井とはお互い前陣スタイルなので組みやすいし、少しプレーも変則的なので相手はやりにくいと思う。今回は年下の酒井とのペアだったので、話しながら試合を進めた。ぼくはいつも良いパートナーに恵まれている」(丹羽)

衝撃の2球目攻撃!!
トリッキーペアがVをかっさらう



↑「明治大で出る最後の試合で優勝できて良かった」(丹羽)と、優勝を決めて酒井とガッチリ握手

3	FINAL	2
丹羽		藤村
酒井		吉村
明治大		愛知工業大
11		6
11		9
8		11
5		11
11		8

左腕の藤村が相手をかき乱し、吉村が破壊力のある両ハンドを打ち込んで決勝進出。全日学決勝の再戦となった決勝では2ゲームを連取されながらも、相手のミスに乗じて追い上げ好ゲームを展開した。最後は丹羽・酒井のカウンターに屈したが、堂々たる戦いぶりを見せた。

粘り見せたが追撃及ばず準V



MEN'S DOUBLES
準優勝

藤村友也 (左)・吉村和弘 [愛知工業大・愛知]

DOUBLES
MEN'S
男子ダブルス

→ 打ち合いで強烈なカウンタードライブを連発し、宇田・張本を沈めて初の表彰台。準決勝では藤村・吉村に「コースが単調で、良いところがなかった」(松山)と完敗だった



松山祐季 (右)・木造勇人 [愛工大名電高・愛知]



水谷隼 (左)・吉田雅己 [beacon.LAB・東京/愛知工業大・愛知]

← 連覇を狙った前回王者は、1ゲームも落とさず準決勝進出。しかし準決勝では「最後までプレッシャーを感じていた」(水谷)と、酒井のチキータに手を焼き、主導権を奪えなかった

BEST 8



松生直明 (左)・鹿屋良平 [リコー・東京]

前回準Vペアは藤村・吉村と激しい打撃戦を展開したが逆転負け。試合後は悔しさをにじませた



宇田幸矢 (左)・張本智和 [JOC エリートアカデミー・東京]

最新のテクニックを見せた中学生コンビは、木造・松山に2ゲームを先行しながら逆転負けで表彰台を逃す



森蘭政崇 (左)・渡辺裕介 [明治大・東京]

田添健・郡山(専修大)、濱川・松下(日鉄住金物流)と強敵を下すも、水谷・吉田には歯が立たず完敗



張一博 (手前)・高木和卓 [東京アート・東京]

日本リーグ屈指の実力派ペアは丹羽・酒井の速さに食らいつき、フルゲームまで迫ったが惜敗



WOMEN'S DOUBLES
優勝

平田有貴 (右)・永尾堯子 [アスモ・静岡]

平田がチャンスを作り、豪腕・永尾が決めるパターンがハマったアスモペアが初優勝。決勝は中盤から攻める展開が増え、最後まで勢いは止まらず栄冠を手にした。

昨年の前期日本リーグから団体戦でも起用されたが、なかなか勝ち星が伸びなかった平田・永尾。優勝会見ではともに「団体戦で使ってもらっているので、日本リーグでも安定して勝てるペアになりたい」とチームへのさらなる貢献を誓った。

勢い止まらぬ快進撃！ 成長見せたアスモペアが初の戴冠！！

DOUBLES
WOMEN'S
女子ダブルス



↑ 競った場面でも思い切りの良い強打を見せた永尾。平田も「決めてくれると信頼していた」とパートナーを評した



流れをつかめず
中電、2年連続の準V

土田美佳 (右)・宋恵佳 [中国電力・広島]

WOMEN'S DOUBLES
準優勝

初戦の森園・加藤 (日立化成・吉祥寺卓球倶楽部) 戦をはじめ、フルゲームの試合を3試合勝ち抜き決勝進出。ともに攻撃力が強く、ここ最近ではコンビネーションも向上。中国電力初の全日本タイトルを狙ったが、決勝は中盤からミスが増え、流れをつかめなかった。中国電力は昨年の土井・土田美紀に続き、2年連続のダブルス準優勝。

→ 政本・朝田との学生ペア対決はフルゲームまでもつれたが、気合いのプレーで押し切る。しかし、土田美佳・宋との準決勝は得意のラリー戦に持ち込めず完敗



山本怜 (右)・明神佑実 [中央大・東京]

WOMEN'S DOUBLES
3位



若宮三紗子 (左)・森さくら [日本生命・大阪]

← 「ダブルスの練習があまりできなかったぶん、頭で勝負した」とダブルスの名手・若宮が森を引っ張る。結成後初の全日本で見事表彰台に上った

BEST 8



政本ひかり (右)・朝田茉依 [同志社大・京都]

攻撃とカットの変則ペアが佐藤・橋本 (ミキハウス・四天王寺高) を下して勝ち上がる



田代早紀 (右)・前田美優 [日本生命・大阪]

日本生命のエースペアは抜群の安定感で順当にベスト8進出。土田美佳・宋にもフルゲームまで迫った



平佑里香 (右)・松本優希 [サンリツ・東京]

コンビネーションの良さが光るが、若宮・森戦では1、2ゲーム目の競り合いを落としストレート負け



阿部愛莉 (右)・徳永美子 [早稲田大・東京]

4回戦で昨年準優勝の土井・土田美紀 (中国電力) を下すも、優勝の平田・永尾には主導権を奪えず



MIXED DOUBLES 優勝

田添健汰 (左)・前田美優

[専修大・東京/日本生命・大阪]

昨年優勝の田添健・前田と、一昨年優勝の吉村・石川の王者対決となった混合ダブルス決勝。競り合った中でも最後まで攻めの姿勢を貫いた田添健・前田が2連覇、そして3度目の優勝となった。大会後には世界選手権の代表に内定した。ともに初の世界選手権での飛躍を狙う。

「(決勝は)相手は世界2位のペアなので、向かっていだけだった。決勝は1、2ゲーム目を思い切ったプレーで取れたのが大きかった」(田添健)

いざ初の世界戦！王者対決制し、堂々の2連覇達成!!



FINAL	
3	2
田添健汰	吉村真晴
前田美優	石川佳純
専修大 日本生命	名古屋ダイハツ 全農
11 14 8 7 11	3 12 11 11 6



↑どんな位置からでも一発でラリー展開を変える田添健の強打。前田も前陣で吉村のボールをさばき切った

2年ぶりの出場となった世界選手権蘇州大会2位の吉村・石川。初戦から相手を圧倒し、オールストレートで決勝へと勝ち上がった。決勝では「2ゲーム目を逆転で落としたのが痛かった」(石川)と、競り合いでの1本を悔やんだ。「5ゲーム目はぼくらが後手に回ってしまった。世界選手権では優勝を目指したい」(吉村)。

世界2位のマハル&カスミ 後手に回りV逃す



吉村真晴 (右)・石川佳純

[名古屋ダイハツ・茨城/全農・山口]

MIXED DOUBLES 準優勝

MIXED DOUBLES

混合ダブルス

→3度目のペアリングで初の表彰台。左右のコンビネーションが良く、第2シードの宮本・高橋(中央大・十六銀行)が敗れたブロックを勝ち抜いた



横山輝 (左)・土田美佳

[原田鋼業/中国電力・広島]

MIXED DOUBLES 3位



時吉佑一 (左)・藤井優子

[ZEOS/愛媛銀行・愛媛]

←時吉の思い切りの良い強打と、藤井の安定したプレーで田添健・前田を2-0とリードしたが、悔しい逆転負け。王者ペアに「準決勝が一番苦しかった」と言わしめた

BEST 8



岡田峻 (右)・古川聖奈

[岡谷市役所/東京富士大・長野]
稲津・堀(明治大・専修大)をフルゲームで下してベスト8入り。吉村・石川に挑んだが完敗を喫した



田中佑汰 (左)・田中千秋

[愛工大名電高/早稲田大・愛知]
気合いの入ったプレーを見せた姉弟ペアがベスト8。2回戦では軽部・天野(シチズン時計・サンリツ)に勝利



及川瑞基 (左)・安藤みなみ

[専修大・東京]
安定感のある試合運びで準々決勝進出も、横山・土田美佳には序盤でペースを握られて敗れた



中林澁貴 (左)・宋恵佳

[原田鋼業/中国電力・広島]
昨年3位の平野・鈴木(協和発酵キリン・専修大)をフルゲーム13-11で下して勝ち上がる

1ゲームを落としたのみの圧勝で木造がジュニア2連覇を達成。チキータからの速攻、鋭くコースを突くカウンタードライブ、後陣からの逆襲と、さらにスケールアップしたプレーで他を寄せ付けない強さを見せた。淡々と落ち着いてプレーする中にも、表情には自信がみなぎっていた木造。逞しさを増した天才がその進化を見せつける完勝劇だった。

「張本を倒すためにジュニアに出場したので、(対戦できず)残念な気持ちもある。張本が他校の選手に負けていたら悔いが残るけど、張本に勝ったのが宮本なので、それは良かった」(木造)

木造 勇人

[愛工大名電高②・愛知]



淡々と、されど力強く
風格漂う
圧勝の2連覇



「全日本の決勝という経験が相手にないぶん、有利だと思った」とストレートで快勝。優勝後はクールに2本指で連覇をアピールした

JUNIOR
Boys

ジュニア男子



宮本 春樹

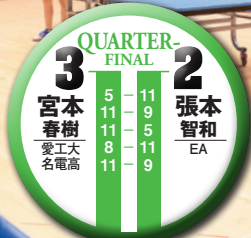
[愛工大名電高②・愛知]



「勝つためにやってきた」
伏兵・宮本が怪物を喰らう

張本との準々決勝を前に「張本に勝つためにやってきた。良い試合をするんじゃなくて勝ちたい」と語っていた宮本。その宣言どおり、フルゲーム11-9で怪物・張本を撃破(下写真)。準決勝でも高見との同士討ちを最終ゲーム4-8からの逆転で制して決勝進出と大ブレイクを果たした。

愛工大名電高の中では目立った存在ではなかったが、昨年のインターハイではシングルスでベスト16に入るなど実力は高い。YGサービスからの両ハンドの安定感が高校球界トップクラスだ。強豪で努力を重ねた男が、ようやく花開く春を迎えた。



※学校名(所属チーム)の後の○数字は学年
 EA = JOC エリートアカデミー



↑母校に初の全国タイトルをもたらし、ベンチの岸監督と喜びを分かち合う



笹尾明日香

[横浜隼人高②・神奈川]

剛球+変化のニュー明日香 強敵なぎ倒し 初全国タイトル!!

タレント揃いのジュニア女子を制したのは笹尾。5回戦で野村(愛み大瑞穂高)とのフルゲーム14-12の接戦に勝利すると、準々決勝で梅村(四天王寺高)、準決勝で世界選手権代表に内定している加藤(吉祥寺卓球倶楽部)、決勝で長崎と強敵を連破し見事に優勝。自身、そして横浜隼人にとって初の全国タイトル獲得となった。これまでは気迫あふれる猛攻のイメージが強かったが、今大会は変化を使った攻守、戦術面などに進境を見せ、新しい「笹尾明日香」で栄冠をつかんだ。

「納得のいく結果を残せていなかったのが、優勝はうれしい。これまでは攻撃一辺倒だったのが、今大会は変化や緩急を使って攻めることができた。実力的にはまだまだなので、明日からまた努力していきたい」(笹尾)



10月の世界ジュニア選考会ではストレートで敗れていた長崎にリベンジ。長崎の攻めを封じ、打球点の早い連続攻撃で押し切った



ジュニア女子



長崎美柚

[EA 中②・東京]

ミュウ
美柚開眼!!
しかし、
決勝は悔恨の涙



全中女王の長崎が、伸びやかなドライブを武器に、決勝進出。準々決勝で塩見真(四天王寺高)を破ると、準決勝では1時間前に女子シングルスでも対戦し、敗れていた早田にリベンジ(下写真)。しかし、決勝では笹尾に屈し準優勝に終わった。敗戦後に見せた涙は表彰式でも止まらず、逃したタイトルへの悔しさをあらわにした(左上写真)。

「決勝は全然良いところを出せずに終わってしまいました。ここまで来て決勝で負けるのが一番悔しい。来年は絶対に優勝したいです」(長崎)



初の表彰台で存在感示した
野田のエース



沼村 齊弥
[野田学園高②・山口]

ライナーハイ2位の
同士討ちには散る



JUNIOR BOYS
3位

高見 真己
[愛工大名電高②・愛知]



クレバーな試合運びで順当に勝ち上がったインターハイ2位の高見。準々決勝では宇田の猛攻に押されながらも華麗な逆転勝利で準決勝進出を決めた。宮本との同士討ちでも幸先良く2ゲームを連取したが、3ゲーム目以降は競り合いで1本が奪えずに準決勝敗退となった。



↑ 同じ中国地方で、よく対戦するという柏に完勝し、ベスト4入り

昨年ベスト8の沼村がワンランクアップの3位入賞。ミスの少ない両ハンドに、フォアドライブのパワーが増し、成長を感じさせた。昨年のインターハイでは初戦で敗れており、「久々の個人戦で緊張感もあった」と語った沼村。木造には及ばなかったが、野田学園のエースとして存在感を示したベスト4だ。

BEST 8



五十嵐 史弥
[遊学館高②・石川]

長身から打ち下ろすドライブを武器に戸上をノックアウトしたが、木造にはうまくかわされ、ストレートで敗れた



柏 友貴
[関西高②・岡山]

フルゲーム2試合を制し、徐々に調子を上げてベスト8入り。フォアで積極的に動き回り、ラリー戦を制した



宇田 幸矢
[EA中③・東京]

力強さを増したプレーで宇田が初のベスト8進出。高見との激戦に敗れたが、成長をアピールした



**世界ジュニア王者
ベスト8で終戦**
張本 智和
[EA中①・東京]

最年少優勝の期待のなかった張本は宮本にまさかの敗戦。競った場面で消極的なプレーが目立った。「優勝しか狙っていなかったため、本当に悔しい」と試合後は涙に暮れた

BEST 16



浅津 碧利
[EA・帝京高①・東京]
初のベスト16進出も沼村との左腕対決に敗れる



戸上 準輔
[野田学園中③・山口]
上位候補の一人だったが五十嵐に打ち負けた



宮川 昌大
[野田学園中③・山口]
一般でも活躍を見せた宮川は張本にも善戦



田中 虹太郎
[東山高②・京都]
4回戦で出雲(遊学館高)をフルゲームで退ける



金光 宏暢
[大原学園高①・東京]
今大会木造から唯一ゲームを奪うも惜敗



田中 佑汰
[愛工大名電高①・愛知]
インハイ3位の実力者は宮本との同士討ちで敗退



三上 貴弘
[遊学館高②・石川]
長身からのカウンタープレーで勝ち上がる



加賀 美利輝
[愛工大名電高①・愛知]
粘り強いラリーで宇田をフルゲームまで追いつめた



世界ジュニア3位の
加藤は2度目の
Vならず



加藤美優

[吉祥寺卓球倶楽部 高②・東京]



世界ジュニア3位、12月の世界選手権選考会で優勝と好調の加藤だったが、2度目のジュニア女王に届かず。準決勝までは1ゲームも落とさない完璧な試合運びを見せていたが、笹尾との試合では得意のバックハンドを封じられ、攻めた場面でもことごとく攻撃を前陣で弾き返された。



満身創痍のひな
左腕対決に打ち負ける



早田ひな

[希望が丘高①・福岡]



↑長崎に敗戦後、痛みで顔をゆがめる

加藤と並び、優勝候補の本命に上げられていた早田だが、準決勝で敗退。大会前に傷めた右ひざに加え、前日から痛み出したという左の上腕の影響が、ゲームを重ねるごとに長崎に押される場面が多くなっていった。

「(長崎に)回転量で上回られた。ひざは世界ジュニア前から痛みがある。でも負けはひざのせいではないです」(早田)。

BEST 8



伊藤佑希子

[札幌大谷高①・北海道]

しっかり回転をかけたバックドライブで皆川(昇陽中)を撃破。加藤には及ばず存在感を見せた



梅村優香

[四天王寺高②・大阪]

昨年3位、第1シードとして臨んだが、笹尾の猛攻の前に変化速攻が不発。悔しさの残るベスト8



塩見真希

[四天王寺高①・大阪]

優勝候補の一角だったが、打ち合いで長崎に敗れて昨年と同じくベスト8で終戦



木村光歩

[山陽女子高②・岡山]

巧みなラリー展開で木原(ALL STAR)、木村(四天王寺高)に快勝したが、早田には完敗

BEST 16



三村優果

[明德義塾高②・高知]

カットの田尻(正智深谷高)をフルゲームで下す



竹内嘉葉

[EA/帝京高①・東京]

丁寧なカットで自身初のベスト16進出



木村香純

[四天王寺高②・大阪]

木村対決に敗れ、昨年に続きベスト16でストップ



岡崎日和

[山口総合高①・埼玉]

重い両ハンドが魅力だが、加藤にはテクニクで翻弄された



野村萌

[愛み大瑞徳高①・愛知]

マッチポイントを奪うなど、今大会笹尾を最も苦しめた



森本枝里

[白子高②・三重]

センスを感じさせるボールさばきで勝ち上がる



出雲美空

[ミキハウスJSC中③・大阪]

相馬(新発田ジュニア)を逆転で下してベスト16



青木千佳

[福井商業高①・福井]

伊藤と接戦を演じたが、あと一本が奪えず惜敗

きづくり・ゆうと

●1999年10月22日生まれ、愛知県出身。左シェーク裏裏ドライブ型。15年度全日本ジュニア優勝、16年インターハイ優勝。16年世界ジュニア代表にも選ばれ、男子団体金メダル獲得に貢献した

木造 勇人

【愛工大名電高】



王者としてプライドがある。張本を倒すために出場した

●出場した3種目で結果を出した木造勇人。ジュニアで優勝、男子ダブルスで3位、シングルスでもベスト8に入った。将来、日の丸を背負うであろう左腕にとって充実の全日本だった。

——3種目を戦い抜きました。そしてジュニアでの連覇、おめでとございます。

木造 今大会は自信になりました。全種目で自分が目標としていたところまで勝ち上がることができました。

——大会前のコンディションはどうでした？

木造 体の調子もプレーも良かったです。それを維持することに気をつけました。少しでも崩れてしまうとボロが出てしまうタイプなので、調子を維持して、さらに向上するようにしました。

——昨年、ジュニアで優勝していて、今年王者として迎えました。大会を迎える気持ちに違いはありましたか？

木造 全然違いました。でもそれは王者としてという意味ではなく、世界ジュニア王者がいるからです。初戦からたくさんのカメラが張本（智和/E.A.）ばかりに張りついていて、ぼくには一台もなかった。メディアは全然ぼくのことを見ていないなど思ったら悔しかったけど、完全に開き直れました。ぼくはノンプレッシャーで、張本のほうがプレッシャーを受けていたと思います。

——ジュニアでマークしたのはやはり張本選手だった？

木造 ぼくは去年優勝していた。それでも今年ジュニアに出る意味があります。それは張本を倒すためです。張本を決勝で倒すための準備をしてきました。

——しかし、実際に決勝に上がってきたのは宮本春樹選手。同じ高校の同級生でした。

木造 完全に予想外です。張本戦も逆転で勝ってきたし、準決勝の高見（真己/愛工大名電高）戦でも挽回して、逆転勝ちしてました。宮本は波に乗っているけど、そ

れを止めるのがチャンピオンだと思って、決勝に臨みました。最初から完全に自分のペースで進めることができました。

——結局、ジュニアは5回戦の金光暢選手（大原学園）との試合で1ゲーム落としたのみで、他はストレート勝ちでした。

木造 金光戦は振り返ると一番きつい試合でした。何が入ってくるのかわからない選手なので、やっつけて怖さがあります。1ゲーム目を落としてしまったけど、そこを乗り越えたからその後の試合が楽にいったのかもしれない。

——世界ジュニア王者が参加する中で2連覇を達成した意味は大きい。

木造 ジュニアの決勝では、ようやくカメラが多くなってましたね。気持ち良かったです。メディアは張本ばかり追いかけていたから、それは悔しいですね。そこに反発したいというか、「おれもいるんだ」とアピールしたかった。張本は世界ジュニアで優勝しているけど、全日本ジュニアでは優勝していないし、ぼくはインターハイ王者としてのプライドもあります。張本が負けた時点でジュニアでの優勝は当たり前だと思っていました。

——ジュニアで優勝した時に「まだ、通過点。明日は一般がある」とコメントしていました。気を引き締めていた。

木造 今回はジュニアよりも、一般でランクに入るということを目標にやってきました。一般のランク決定戦は大矢（英俊/東京アーツ）さんで、12月の選考会ではゲームオールで負けていました。準備の仕方や対戦のイメージはわかっていたし、ビデオを見て研究してきました。

その次が坪井（勇磨/筑波大）さん。（松

平）健太（ホリプロ）さんが上がってくると思っていたけど、「健太さんより強い坪井さんが上がってきたんだ」と思って、気持ち的に向かっていきました。

——水谷隼選手（beacon・LAB）との準々決勝では善戦しました。

木造 勝ちに行っただけですけどね。チャンスはあると思っていましたが、全体的に相手のほうが上でした。

——一般でのベスト8は立派だと思えます。この1年で何が伸びたのでしょうか？

木造 世界ジュニアで負けてからコース取りを見直しました。もっとストレートを意識するようにして、積極的に攻めることを心がけようと。フォア、バック、チキータでストレートで厳しく狙う。水谷さんにもストレート攻撃が効いて得点できたし、相手を見ながら打っていくというのが今回はできたと思います。

——しっかりとアピールできた大会になりましたね。

木造 ジュニアで2連覇して、一般でベスト8に入って、今回がぼくの卓球人生のターニングポイントになってほしい。これからどんどん勝って、東京五輪に向けて頑張っていきたいと思っています。張本だけじゃないぞとアピールできたと思います。

来年からジュニアはないし、一般でもうひとつ勝って、表彰台を狙いたい。目標は高くなっています。

——最後に今年の目標をお願いします。

木造 この1年だと春の選抜とインターハイは連覇したいです。でもそれも通過点。今度こそ世界ジュニアで勝ちたい。そして世界選手権に出られるように、そこを目指して頑張ります。

笹尾明日香

【横浜隼人高】

ささお・あすか

●1999年12月15日生まれ、神奈川県出身。右シェーク裏表速攻型。強烈なフォア強打と闘志あふれるプレーで、2013年カデット14歳以下3位、2016年インターハイベスト8。今回の全日本ジュニアで初の全国タイトルを獲得

「強くなれる」と思ったら 気持ちが楽になった

●加藤美優（吉祥寺卓球倶楽部）、早田ひな（希望が丘高）をはじめ、猛者揃いのジュニア女子を制した笹尾明日香。勝利に対する意識の変化が、彼女を初の全国タイトルへと導いた。

——優勝おめでとうございます。優勝から数日経ちましたが、今の気持ちは？

笹尾 たくさんの方から「おめでとう」と声をかけてもらって、優勝できて本当に良かったです。優勝は自信になりましたが、まだまだ未熟なので、もっと頑張らないといけないと思っています。

——自身にとっても、横浜隼人^{はやと}にとっても初の全国タイトル獲得ですね。

笹尾 本当に先生方の指導のおかげだと思います。チームメイトや、練習してくれた方々、家族の協力もあっての優勝なので、感謝の気持ちしかありません。

——振り返ってみて、一番苦しかった試合はどの試合でしょうか？

笹尾 全試合苦しかったですけど、一番は5回戦の野村（萌／愛み大瑞穂高）さんの試合です。2-0から追いつかれて、5ゲーム目も8-10までリードされた。「取らなきゃ」と思っている状態で相手にポイントを取られ続ける展開で、考えて考えて、なんとか最後に逆転して勝てました。

——そこからは梅村優香選手（四天王寺高）、加藤美優選手、長崎美柚選手（EA）と実力者を次々に倒した。

笹尾 昨年10月の世界ジュニアの代表選考会で、その3人全員に負けていて、通算の対戦成績もあまり良くなかった。だから対策をしっかりと練って、自分は思い切った戦うだけでした。

——準決勝では世界選手権の代表にも内定している加藤選手に勝利しましたが、どのように試合に臨みましたか？

笹尾 加藤さんは準決勝まで相手を圧倒して勝ち上がってきていて、サーブスからのバックハンドが強い。どうにかそこをレシー

ブで崩そうと思っていました。

——決勝の相手の長崎選手も優勝候補の早田選手に勝って、勢いに乗っていた。

浜本 長崎さんには世界ジュニアの選考会でストレートで負けていたので、相手が年下でも向かっていくだけでした。左利きの対策練習は重点的に取り組んでいて、その成果が出せたと思います。

ベンチの岸（昌宏）先生から決勝前に「吉村（真晴／名古屋ダイハツ）は全日本の決勝で強くなった。お前もこの試合で強くなるんだ」と言われ、気持ちが楽になりました。勝ち負けじゃなく、「この試合は強くなるためのチャンスなんだ、全日本の決勝を経験することで強くなれるんだ」と思ったら、のびのびと戦うことができました。

——優勝会見で「変化や緩急を使えるようになった」と語っていましたが、意識して変えた部分なのでしょうか？

笹尾 実は偶然もあります（笑）。全日本の前に足を故障して、あまり動けなかった。でも試合には勝ちたいし、その中でどうやって勝つかを考えた時に、相手に攻めさせてからのパターンを鍛えました。その結果、打っても守っても点が取れるようになって、戦い方の引き出しが増えましたね。

——昨年の全日本ジュニアはベスト16でしたが、この一年間で成長したと感じる部分はどこですか？

笹尾 実業団の方と練習させていただいた時に、みんな「どうしたら勝てるか」を真剣に考えていて、自分は勝ちに対する意識が低い、もつと深く卓球を考えないといけないと感じました。それから本を読んだり、動画を見たりして、考える機会を増やしています。技術でも戦術でも、全部を取り入

れるのではなく、良いなと思うものを自分で考えて組み合わせるようになっていきました。これは違うかなと思うことでも、他の部分で活かせることもあるので、自分なりにアレンジして取り込んでいく。そうするようになってから力がついてきた感覚があります。

——メンタル面でも変わった部分はある？

笹尾 昔は試合をする前から「この人強いからなあ……」と思って、最初から諦めているところがありました。でも森蘭（美月／サンリツ）さんに試合中どんなことを考えているのか聞いた時、「最後は自分が勝つ、と自分を信じてあげる。じゃないと試合をしている自分がかわいそうだよ」とおっしゃっていて感動したんです。それを聞いてからは、私も自分自身を信じてあげて、自分のプレーをすること、相手に勝つことだけに集中できるようになりました。

——同世代には世界で活躍する選手が揃っていますが、笹尾さんから見て彼女たちはどんな存在なのでしょう？

笹尾 昔は手の届かない、遠い存在だと思っていました。でも、そう思っているうちに勝つなんてムリだと気づいた時に、悔しい気持ちも湧いてきた。「憧れ」だったのが「越えたい」という思いが強くなりました。

——最後に今後の目標をお願いします。

笹尾 まずはインターハイでの優勝が目標です。個人はもちろん、横浜隼人というチームを学ばせてもらったので、お世話になった方々に団体で優勝して恩返しをしたい。世界選手権やオリンピックで優勝……とはまだ自信を持って言えないけど、世界で戦いたい気持ちはあります。一步一步成長していきたいです。





●男子シングルス3位の平野友樹(右)はどんな相手にも全力で挑んでいった

史

史上最多優勝と史上最年少優勝。男女シングルのチャンピオン、水谷隼と平野美宇が新たな記録を打ち立てた平成28年度全日本選手権。

例年はトップ選手が中心となる全日本選手権の取材だが、今年は大大会序盤の一般・ジュニアの1〜3回戦で、全国の予選を勝ち上がった「ローカルヒーロー」の選手たちに話を聞く機会があった(130〜133ページ参照)。

毎年予選に挑戦して、7年ぶりに全日本出場を果たした徳島の42歳、西川義文選手。高校時代から県外の強豪選手に勝つ方法を考え、ひたすらサービスを磨いて歓喜の1勝を挙げた、鳥取の山添良太選手。宮城の遠藤幸奈選手は、国立大学のハードな講義の合間に練習を積み、県予選を4位で通過。「緊張したらもつたないから」と、笑顔で伸び伸びとしたプレーを見せた。

いずれも地元では一置置かれる強豪選手だが、怪物やスーパーマンではない。時間をやりくりし、勝つために知恵を絞り、全日本という大舞台に立った。改めて日本卓球界の層の厚さを感じるとともに、全日本出場という目標に挑み続けた選手たちに、尊敬の念を抱かすにはいられない。

挑む者と 挑まれる者。 両者が織りなす 全日本のドラマ

全日本 俯瞰の眼

今大会のミックスゾーンで、話を聞いた選手は延べ70人以上。ローカルヒーローの戦いに興奮し、年齢を超えた闘志のぶつかり合いにシビれました……。

文=柳澤太朗
text by Taro Yanagisawa

この「挑む」という言葉が、今大会で多くの試合を取材していく中で、最も頭の中に浮かんだキーワードでもある。若手の躍進が目立つ近年の全日本。年上の選手たちも全日本で勝つためには余計なプライドを捨て、全力で挑むようになっていく。「年下だけど格上」。対戦相手をそう表現する選手が何人もいた。男子シングルスで3位に躍進した平野友樹は、4回戦で張本智和の雄叫びにひるむことなく、抜群のフットワークと気迫で完勝した。平野は張本よりも11歳年上。しかし、「技術力は相手のほうがすべてにおいて上」と言い切り、挑戦者に徹した。

一方で、女子シングルス決勝の平野美宇対石川佳純戦は、「あれだけ向かってこられると立て直すのは難しい」と石川が試合後に語ったように、若い平野が全力で女王・石川にぶつかっていた一戦だ。両者のコントラストをより鮮明にしたもの。それは今大会の統一球だった『バタフライスリースターボールG40+(以下『Gボール』)ではなかっただろうか。女子決勝での平野の攻撃は、昨年より数段迫力を増していた。シングルの改造やトレーニングの成果であることは言うまでもないが、ボールの違いによるところも大きかったはずだ。同じブラボールでも、

昨年の決勝の使用球は軟らかめの紅双喜のボール、今年のは硬めでやや回転量が落ちる『Gボール』。平野はインタビューで、「Gボールではスピードで勝負しようと考え、怖さの出るボールを練習しました」と語った。大会前からボールの違いを意識して調整したことが功を奏した形だ。



●石川に対して、最後まで攻めの姿勢を貫いた平野(左)

どの選手もボールについては、最後には「相手も同じ条件だから言い訳できない」というひと言に行き着く。しかし、『Gボール』は積極的に攻撃を仕掛ける、「挑む者」に有利なボールだと感じた。

そんなボールの変化にも対応し、絶対王者としてタイトルを守り続け、通算9回優勝の新記録を作った水谷はやはり凄い。平成23・24年度大会では吉村真晴、丹羽孝希という若い力に対して、勝利を目前にして受け身に回り、優勝を逃したが、今の水谷はどんな相手でもがっちり受け止め、最後はきっちり寄り切る「横綱相撲」を取ることができる。

女子で優勝した平野は、来年はすべての選手が自分に立ち向かってくる中、怖いもの知らずのプレーができるかどうか。昨年の世界ジュニアでは格下の選手の強引なカウンターに手を焼き、調子を崩した。横綱になるには、もう少し時間がかかりそうだ。

挑む者が挑まれる者になり、また挑む者が現れる。それを繰り返す中で、来年の全日本もまた新たなドラマが生まれていく(文中敬称略)。

ALL・JAPAN FLASH!!

2017.1 全日本フラッシュ!



祝 最多優勝回数達成 & 最年少優勝!!!

水谷隼選手の全日本最多優勝回数達成、平野美宇選手の最年少優勝記録更新と、新記録樹立で終わった平成28年度全日本選手権。今大会の話題をギュッとまとめて紹介する。



過去最高の観客動員数
2万7千人
熱狂!!

▼取材するメディアの数も年々増加



▼サインを求める人で、フェンスも倒れそうに



大 会最終日の1月22日。16歳9カ月・平野美宇 (EA / 大原学園) の最年少女王誕生、そして貫禄を見せた水谷隼 (beacon.LAB) の9回目の最多優勝達成に、ほぼ満員となった会場は熱狂した。

来場者の数は年々上昇中。平成22年度は1万5千人(延べ人数 / 以下同)だったが、世界卓球東京大会開催に加え大会期間が7日間になった平成26年度には大幅アップの2万4千人を記録、そして今年度は2万7千人以上が来場した。年々メディアでの卓球の露出も増えていた中で、今年度はリオ五輪での選手たちの活躍も追い風となり、過去最高(統計史上)の来場者数を記録した。

●来場者数の推移 (平成22年度より)

年度	人
H22	15,000
H23	15,800
H24	17,900
H25	18,600
H26	24,500
H27	25,300
H28	27,200

延べ人数

最後の2日間は、9時の開場前から大行列。体育館の裏側まで人の列が続いていた

土日は当日券が売り切れるほど多くの人が来場



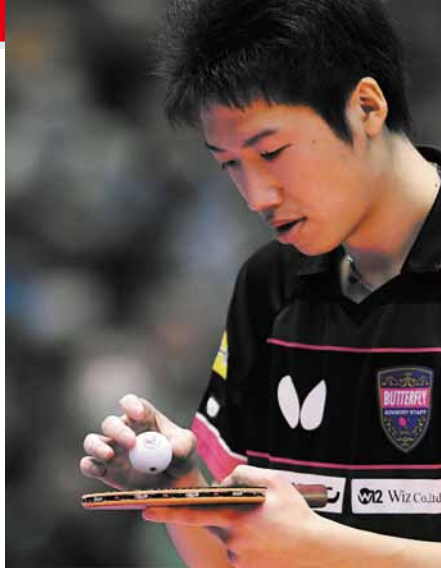
ここが変わった 2017.1 全日本



Change 2

五輪卓球台を使用

リオ五輪で使用された卓球台「infinity (インフィニティ)」(三英)が、初日から4台設置。その他の台も、五輪と同じ「レジュブルー」カラーの台が並び、まさに五輪仕様。2016年度グッドデザイン賞も受賞した美しい五輪卓球台が、会場に彩りを添えた



Change 1

初の統一球採用

前回までは、全メーカーのボールが用意され、試合での使用球は選手間のジャンケンで決められていたが、今年度は初の統一球を採用。入札により、『バタフライ スリースターボールG40+』が全試合で使われた。これにより、ボールの性質の差が試合を左右することはなくなった

Change 4



全試合を生配信

テレビ放送が行われない大会初日から5日目の間、全コートの試合、合計1,204試合がインターネットでライブ配信された。今回はテスト配信ではあったが、5日間のページビュー数は50万419で、延べ7万人以上が視聴した



Change 3

アドバイスの自由化

ジュニア以外の一般種目では、ラリー中を除きいつでもベンチからのアドバイスを受けることが可能となった。「ベンチも一体となり試合を盛り上げ、大会を活性化させる」という目的だったが、そこまで目立つアドバイス風景は見受けられなかった(写真はベンチでのアドバイスの様子)

優勝者サインも当たる 抽選会開催

期間中は、全日本卓球のアンケートに答えた来場者の中から抽選で選手のサイン入りグッズなどが当たる抽選会を連日開催。土日には、限定アイテムとして、男女単・複優勝者がテレビカメラに向かって書いたビクトリーサインも賞品に! ゲットした当選者は幸せ者です



Change 5



光輝く五輪メダル!



リオ五輪の実物メダルが会場内に登場! 水谷選手と石川選手の厚意により実現した特別企画は、実物を見られるとあって多くの人が撮影。もちろん、メダルの横では警備員がガッチリガードしていました

Change 6

照明演出は控えめに

ここ数年、シングルス決勝前は会場全体の照明が暗くなり、選手や卓球台をライトアップしていたが、選手にとってはボールが見づらくなる原因に。そこで今年は「選手第一」、入場時のみの演出で、控えめになった



海外トップ選手から全日本卓球へメッセージ

男女決勝前、オフチャロフ(ドイツ)、帖雅娜(香港/写真)ら海外トップ選手からのスペシャルなメッセージが大型ビジョンに映し出された



伊藤、早田、張本 全日本の厳しさ痛感



初日の会見で笑顔を見せる若手に、全日本は厳しかった

大会初日に会見を行った、世界ジュニア金メダルの女子16歳トリオと張本。4選手がどこまで勝ち進むのかに期待が集まっていたが、優勝した平野以外の3選手に、全日本は、この舞台上で勝ち進むことの厳しさを痛感させた。

優勝狙った美誠 思わぬ敗戦に 顔をしかめる

リオ五輪団体銅メダリストの伊藤美誠(スターツSC)は、安藤(専修大)に足もとをすくわれ、まさかのランク落ちという結果に顔をしかめた。「今回はシングルスのみ(出場)で優勝を狙っていたし、石川さんや美宇ちゃんの対策をやってきましたが、練習から上を見すぎていたのかもしれない。もっとコツコツ1回目、2回目の相手の対策をやるべきだった。全体的に良いところはなかったし、固くなって振り切れていない感じでした。(ランク決定戦の)2ゲーム目の後半、打ち急いだのがもったいない。もう少し我慢しても良かった」と悔しさをにじませた。



存在感見せた カットマン



女子シングルスでは3位に橋本帆乃香(四天王寺高/上写真)、佐藤瞳(ミキハウス/右)、ベスト8に石垣優香(日本生命/右奥)が入り、カットマンが存在感を見つけた。高校生カットマンの橋本の3位入賞は、1986年度(S61)の内山京子以来、実に30年ぶりの快挙となった



張本、最年少 ジュニアV逃す

13歳の世界ジュニア王者・張本智和(EA)にとって、今大会は「今までで一番悔しい全日本」に終わった。優勝確実と思われていたジュニアで、まさかの準々決勝敗退。試合後「絶対負けないぞという気持ちだったので悔しい。メンタルの強さがまだまだ足りない」と泣きはらした目で語った。一般単では平野(協和発酵キリン)を崩せずベスト32、宇田(EA)との男子復はベスト8。中学1年生としては素晴らしい成績ではあるが、最後まで悔しさを隠しきれなかった。「今回勝てなかった理由をしっかりと探して、次の大会につなげていきたい。大きな舞台上で絶対に負けない実力を持てるようにしたい」(張本)。



↑ジュニアで敗れた直後、頭を抱えて座り込んだ張本

まんしんそうい 満身創痍の早田。上位に進めず

12月に傷めた右ひざ、そして大会中に左上腕の痛みに襲われた早田は、ジュニアでは準決勝で敗退。一般では芝田(ミキハウス)に敗れベスト32に終わった。「すごく悔しいですが、この結果をしっかりと受け止めて次につなげたい。国際大会でも結果が出てきて、世界で通用するようになってきたかなと思っていたけど、日本一になれないと世界のトップには立てない」(早田)。

痛む上腕にアイシングをして会見にのぞんだ



一般最年少・小6木原 今年も2回戦進出

一般単に出場の小学生は、木原美悠(ALL STAR/右)と赤江夏星(卓栄kid's)、大藤沙月(フェニックス卓球クラブ)の6年生3名。誕生日により2年連続最年少となった木原は、1回戦を勝利、2回戦でも実業団選手と好勝負を繰り広げた





塩野真人
●東京アート

新しい選手が出てくる一方で、第一線を退く選手も多くなる。実業団でチームを引っ張ってきた選手たち。今までありがとう、そして、お疲れさまでした

「最後の全日本」 お疲れさま



久保田隆三●シチズン時計

中学3年でジュニアに初出場し、17年間、全日本という舞台で必死に戦ってきた久保田隆三も、ラケットを静かに置いた。「ホッとした気持ちと寂しい気持ちが半々です。終盤には「これで終わりかな」という思いが込み上げてきました。これからは、会社に恩返しをするために仕事で頑張ります」(久保田)

ジャパンオープン優勝、世界代表として活躍。カットマン・塩野、全日本を去る

ジャパンオープン優勝、2014世界卓球東京大会銅メダリストと、日本代表として戦ってきた塩野。「最後は近くで見てほしかった」という父をベンチに迎え戦った男子単5回戦は上田(協和発酵キリン)に敗退。「やりきった感じです。今のぼくの力は出せたかなと思います」。そして最後の試合となった男子複5回戦では、宇田・張本の中学生ペアに惜敗し、現役生活に終止符を打った。「勝負所で強気でやらなかったけど、誇れる引退試合でした。本当に幸せな卓球生活でした。これからは裏で選手を支えるような仕事をしたい」(塩野)。



水野裕哉

●東京アート



小野竜也

●協和発酵キリン



橋津監督(野田学園)の教え子一期生である水野と小野。最後は恩師とカメラに収まった

観客席からの大きな声援を背に、最後の一本まで諦めずに戦った協和発酵キリンの主将・小野竜也。最終試合の男子複4回戦後、パートナーの平野と抱擁し涙。「感謝しかないです。みんなに応援していただきプレーできたことは幸せでした。もっとやっていたいという気持ちもありますが、やりきったという気持ちもあります。でも、すごく楽しかったです」(小野)

吉村(名古屋ダイハツ)との激しい打撃戦を最後にラケットを置いた、東京アートの主将・水野裕哉。「長く卓球をやってきているいるあったけど、家族など皆に助けてもらい感謝したい。最後はさっぱりした気持ちで終わるかと思ってたけれど、(吉村)真晴に「お疲れ様」と言われてウルっときました」(水野)

阿部恵

●サンリツ



過去、女子複・混合複で合計5つの全日本メダルを獲得。変化攻守からのフォアスマッシュという独自の卓球を追求し、変化攻守型に希望を与えてきた阿部恵も、今年度の引退を表明。「自分が強い時に終わりがかった。卓球を好きなままで終わりたいと思っていました」(阿部)

卓球に真摯に向き合い続けた山本に河野氏が世界団体金メダルをプレゼント



山本真理

●オークワ

希少なペン表で女子最年長出場の39歳・山本真理。キレのあるプレーで3回戦まで勝ち進み、現役生活を終えた。「仕事と卓球の両立で21年させていただきました。最後の試合は悔しい。でも感謝の気持ちでプレーできたことに悔いはありません」(山本)。

77年世界チャンピオン・河野満氏の元に「技術と心を教えていただきどう」と何度か足を運んでいた山本。卓球に対する真摯な姿勢に感銘を受けた河野氏は、山本に世界団体の金メダルをプレゼントした。感涙の山本は「一生そばに置いて宝物にします」と笑顔で応えた。



足立智哉

●日鉄住金物流

爽やかなドライブ速攻が武器の足立智哉も20年の選手生活に終止符を打った。「最後の試合と違ってすごくやり込んできたから悔いはないですが、この緊張感が卓球がもうできないのかと思うと寂しい。今後は会社に残り仕事をします。これからは楽しく卓球とつきあいたいですね」(足立)



沼田勝

●日鉄住金物流

日鉄住金物流の主将・沼田勝は、4月に同社入社予定の藤村(愛知工業大)に敗れ、最後の全日本を終えた。「最後が藤村くんで良かった。新旧交代で彼には頑張ってもらいたい。これからは仕事で転勤もあると思いますが、OBとして後輩を見守ります」(沼田)

ベンチで奮闘、元全日本王者

選手以外にも多くの卓球有名人を見かけるのが全日本。今大会、ベンチ姿をキャッチした元全日本一般チャンピオンをここに紹介
※カッコ内は優勝年



佐藤利香さん (S63, H3)
前全日本優勝最年少記録保持者 (17歳1カ月)



高島規郎さん (S47,53,54)



渡辺武弘さん (H3)



今枝一郎さん (H6)



偉閑晴光さん (H9,10,12,15)



坂田愛さん (H10)



平野早矢香さん (H15,16,18,19,20)

水谷ベンチの「君の名は」——GC



王者・水谷隼のベンチに入っていた男性は、水谷選手が初めてドイツに渡った時のチームメイトであり、それ以来の友人というGC(ギーツェ)氏

インパクト大!! 和弘へア

ネットでも話題となっていたのが、男子準優勝の吉村和弘(愛知工業大)のヘアスタイル。ヘアバンドで押さえ、試合中もスタイルそのまま、クールなヘア&フェイスでスゴ技連発!



ウェアに合わせて時計も変える



常時、時計を9種類持ち歩いているというシチズン時計の神巧也。ウェアに合わせて時計もチェンジ。しかし、「試合中は時計を見る余裕がありません(笑)」とのこと

TOPICS



ミウちゃんコレクション

いろんな表情を見せてくれた新女王。試合中に見ているファイルには「技術的なことはそんなに書いてないけど、試合で大切なことが書いてある」。頭に氷を乗せるのは「集中力が上がるから。何かに本に載っていた」とのこと



大勢のファンが見守る中、9度目の優勝を決めた水谷隼。同選手のV9達成に、水谷ファンが手作りカードで祝福!



お米にお肉、そして高級時計。魅力的な副賞の数々

各種目優勝者へペアへ贈られる副賞は非常に魅力的。全農からは、お米や青果物、たまごに和牛肉、若鶏加工品、ドライフルーツなどがどっさり。そして、シチズン時計からは、高級な腕時計が贈られた。ちなみに、一般単優勝者への副賞のお米は、なんと1トン!!!!



佐藤 隆

勝利後のキラキラ笑顔、永尾堯子(左) & 平田有貴 いただきました



小野竜也&大島祐哉の華麗な背面打ち

今年も好評。卓球FM

場内でのみ聴くことができるラジオ「卓球FM」は、今年も大好評! 森本文江さん(写真上右)、山梨有理さん(同左)、松下雄二さん(写真下右)、仲村錦治郎さん(同左)が解説を担当。着眼点はさすが!



世界へ届け。善意の用具

「スポーツ・フォー・トゥモロー」の一環で開発途上国へ届ける中古のラケット・ラバーを会場募集。来場者の善意により、ラバー1,350枚、ラケット118本が集まった



会場でスポーツ相談

スポーツ医・科学委員会メンバーが栄養や故障の相談に対応。アンチドーピングが学べるブースも設置



立派な野菜がドーン!!

全農のブースでは、アンケートに答えると新鮮で立派な野菜や卵・お米が土日合計1トン当たる大抽選会が開催された

SNS記念写真を発信!

SNSに最適な撮影ブースが登場。全日本卓球のイメージパネル(上写真左端)で撮影しSNSに投稿すると、記念ボールが当たるイベントも開催された

ブースめぐりも全日本のお楽しみ

震災を経験し、卓球ができることに感謝

東日本大震災による帰還困難区域にある福島県大熊町出身の原田優芽(福島・喜多方卓球ランド)は、初の一般シングルス出場&初勝利。「震災前は当たり前のように卓球をしていましたが、震災後と同じクラブの子たちとも離れたり、一時期卓球もできなくなった時もありました。その後卓球ができるようになったことに感謝していますし、全国大会などにたくさん連れて行ってくれている両親にも感謝しています」(原田)。今春、地元の高校に進学予定。夏の福島インターハイでの活躍を目指す。



会場内のブースめぐりも楽しみのひとつ。新製品が展示されていたり、お買い得商品、限定商品の販売や、ブース来場者へのプレゼント抽選なども行われた

単なる記録映像ではない。

国内最高峰大会を題材にしたエンターテインメント作品

卓球は大変な時代に 突入した!!

好評
発売中!

凄まじいラリー!
圧倒的なスピード!
見る人を唖然とさせる
驚愕のテクニック!
彼らは卓球のイメージを
完全に破壊した!!

ALL JAPAN
THE
FINAL
2017.1

[ザ・ファイナル 2017.1]

平成28年度全日本卓球選手権大会ダイジェストDVD

伊藤条太：責任編集

統一球によって、誰にとっても公平な舞台が整った。
飛躍的なレベルアップを見せつけたジュニア世代、
熟練の技を駆使し、迫力あるプレーを魅せたベテラン勢、
人間技とは思えない彼らの高度な技術を、プロの映像スタッフが撮影。
全日本ダイジェストDVD『THE FINAL』、決して見逃せない一枚だ。



[ザ・ファイナル 2017.1]

平成28年度全日本卓球選手権大会
(2017年1月16日~22日)の熱戦を卓球王国独自の切り口で編集。男女シングルス、
男女ダブルス、混合ダブルス、男女ジュニアの全7種目をダイジェストで収録

▶ 収録時間：約90分

▶ 商品番号：D-075

4,320円 [本体4,000円+税]

監督：伊藤条太

制作・販売：(株)卓球王国

撮影・編集：(株)フリークセブン



平成24年度の **絶賛発売中!**
全日本ダイジェストDVD

丹羽、電撃の初優勝!
強さ際立つ福原の連覇!!

[ザ・ファイナル 2013.1]

4,115円 [本体3,810円+税]



平成25年度の **絶賛発売中!**
全日本ダイジェストDVD

水谷と石川、王座奪還!
興奮のゲームの数々

[ザ・ファイナル 2014.1]

4,320円 [本体4,000円+税]



平成26年度の **絶賛発売中!**
全日本ダイジェストDVD

プラボール時代突入!
ダイナミックなバトル満載!!

[ザ・ファイナル 2015.1]

4,320円 [本体4,000円+税]



平成27年度の **絶賛発売中!**
全日本ダイジェストDVD

見応えのあるラリーの応酬
進化した卓球がここにある

[ザ・ファイナル 2016.1]

4,320円 [本体4,000円+税]

●お近くの卓球専門店、スポーツ専門店、または卓球王国WEBでご購入ください

(一部取り扱っていない店舗もございます/書店での取り扱いはありません)

*卓球王国製作のDVDの無断複製・無断レンタルを禁止します

JUN MIZUTANI

THE CHAMPION'S INTERVIEW-1

[チャンピオンインタビュー]

水谷隼

● beacon.LAB

齋藤清、小山ちれの8度を抜いて、史上最多の9度目の優勝を達成した水谷隼。しかし、どこか物憂げで、記録達成の晴れ晴れとした表情を見せない王者。五輪メダリストとして「勝って当たり前」の状況下での優勝は彼のプライドを満たすものの、感激の琴線には全く触れないようだ。史上最多の記録を作っても笑顔のない彼の表情の裏側を探った。

「ぼくはこれから重ねて、優勝したとしてもさらに優勝を重ねて、優勝したとしても若くして誰かが優勝しないですね」
抜けるなんて到底思えないです
そんな記録を作りたいです

聞き手=今野昇(本誌編集長)
interview by Noboru Konno
写真=中川学&奈良武
photographs by Manabu Nakagawa & Takeshi Nara

相当に危機感がありました。あまりにもグランドファイナルの時に身体が動かなくて、やばいなと思ってました

終わってみれば、今大会もやはり「水谷劇場」だった。

全日本選手権で史上最多の優勝を決め、2日後にはヨーロッパチャンピオンズリーグ参戦のために日本を出発。さすがに疲労とストレスのせいか、1週間後に帰ってきた時には口内炎に苦しんでいたチャンピオン。

史上最多の記録を打ち立てたというのに、インタビュに答える水谷の表情に笑顔はなかった。五輪メダリストが受けた「勝って当たり前」の重圧は本人でないところからない。今までの優勝の時とは違うチャンピオンのインタビュが始まった。

——8月にリオ五輪が終わって、そこからは殺人的なスケジュールでテレビ出演や取材があり、ヨーロッパでの試合もありました。大会前の調整はどうでしたか？
水谷 (ITTFワールドツアー) グランドファイナルが終わったのが12月9日で、そこから1カ月ありましたが、相当に危機感がありました。あまりにもグランドファイナルの時に身体が動かなくて、やばいなと思ってました。

まず1カ月間で体重を落としました。食事制限とトレーニング、そして練習はちょこちょこやってました。オリンピックの時よりも5kgほど体重が増え、1カ

「油断ではないけれど、
『このメンツで負けたらどうしよう』と思った。
それで弱気になっていた。強気で勝負するんじゃないで、
安全に行こうと思ってしまった」

月間で3kg落とした。そして大会期間中に2kg落ちていたので、合計5kg落ちて、ベスト体重ですね。

——全日本前にもやり込んだ時期はないのかな？

水谷 ないですね。全然練習はやれていない。ただどこかでこれはいけるなと手応えを感じた時期があったんですね。それは年が明けて1月の中旬でした。それまでは不安でした。ボールが替わって(バタフライ)Gボールでやったことがなかったもので、ボールの弾みとかに戸惑いましたね。ボールに慣れたのが1月上旬でした。サーブ、レシーブが一番難しく、慣れるまで1カ月くらいかかった。

Gボールは横回転サーブを出すのが横に曲がりすぎて、サイドを切って台から出てしまう。加えて、相手サーブの見極めがめちゃくちゃ難しい。特にハーフロングの見極め。台から出そうでない、出てないように見えてみんな出ているのか。

——今までの全日本

と今回の大会前の状態では全然違いますか？

水谷 だいたい同じです。大会前はそこそこ自信はありました。納得するようなサーブは出せなかったけど、そこは何とかなるだろうし、他の技術でカバーしようと思ってました。ただGボールで試合をしたことがなかったので、そこは不安でした。

——いざ大会が始まり、初戦はシチズンの加藤(悠二)選手。

水谷 1ゲーム目、7-2から落としました。初戦の1ゲーム目を落としたのは初めてかもしれない。ちょっと出足が良すぎて油断してしまいました(笑)。

——次の5回戦が及川(瑞基・専修大)選手、6回戦が緒方(遼太郎・JOCエリートアカデミー/帝京)選手だった。

水谷 及川戦とかは調子がよかったです。6回戦は森蘭(政崇・明治大)かなと思ってましたが、緒方が来たからラッキーだなと思いました。緒方とはオリンピック

夕前によく練習していたので

勝てるイメージができあがっていました。

——準々決勝は木造(勇人・愛工大名電高)選手でした。

水谷 2ゲーム目を落としましたが、勝ってベスト4。そこまで勝ってくるだろうと思ってた選手が負けていた。組み合わせとしては今までが一番苦しいかと思いましたが、厳しい相手と思っていた選手が次々負けていた。まあ、よくあるパターンですね。ラッキーだな、ついでなと。ただただ自分が優勝に近づいているなという感じですよ。

4ゲーム目、1-4で負けていて、自分のボールがネットインで入って相手が空振りした。
そこからやっと「流れが来たな」と感じました

今回の全日本選手権の男子シングルスは何とも不思議な感じで進んでいった。本命の水谷を追いかけつけていくはずの対抗馬が次々と姿を消していったのだ。

水谷を襲った最大のピンチは準決勝の平野友樹(協和発酵キリン)戦だった。平野の果敢な攻撃を受け、いきなり0-2とゲームをリードされる。これは5年前の決勝で吉村真晴に負けて以来の展開だった。



THE CHAMPION'S INTERVIEW-1

JUN MIZUTANI

—— 準決勝が平野友樹選手でした。

水谷 公式戦で当たるのも久しぶりだし、前にやった試合はあまり覚えていない。ただ協和発酵キリンに練習に行つて、たまに一緒にやっていたけど、友樹はあまり当たりたくない選手のひとりでした。サーブिस、レシーブがうまいし、ラリーも強いし、そんなに隙がない選手です。

—— いきなり2ゲーム落としました。

水谷 1ゲーム目と2ゲーム目はアンラッキーなポイントがメチャクチャ多かった。木造戦もそうだったから「この大会はついてないな」と思っていました。こうなったら我慢するしかない。アンラッキーのまま、この試合は終わらない。どこかでチャンスが見えてくるだろうし、五分五分にさえなればいい。そこまでは我慢しようと思いました。

4ゲーム目、1-4で負けていて、自分のボールがネットインで入って相手が空振りした。そこからやっと「流れが来たな」と感じました。

友樹は2ゲーム目はメチャクチャ良かったですね。打てば入るといふ感じでした。3ゲーム目の中盤までは相当に仕上がってました。3ゲーム目の1-4になった時は「これは負けるな、いかれるな」と思いました。そこでベンチコーチに入ったGC (Foerster) がタイムアウトを取った。彼は名コーチですよ(笑)。そこで初めてベンチにGCがいたんだと思いました(笑)。ぼくはタイムアウトを取る気はなかった。「この運命を受け入れるしかない。流れも来ないし、今年は天に見放された」

となかば諦めてたけど、そこでGCがタイムアウトを取ってくれて、いろいろアドバイスしてくれて、そこからガラッと流れが変わった。

—— 相手(平野)は相当調子が良かったけど、途中でつけない隙が見えたのかな。

水谷 友樹は確かに調子は良かったけど、それ以上に自分の調子が悪かった。木造の時から良くなかった。組み合わせも見えてきて、みんなが負けて、これはチャンスだと思い始めたら、逆にナーバスになってしまった。

油断ではないけれど、「このメンツで負けたらどうしよう」と思った。それで弱気になっていた。強気で勝負するんじゃないかと、安全にしようと思ってしまう。

—— 平野戦ではどの辺でいけると思っただらうか？

水谷 だんだんレシーブができるようになって、サーブिसからの3球目も効くようになってきて、5ゲーム目の中盤あたりから完全に点数の取り方がわかってきた。これは勝てるかもしれないと思った。

—— 去年はチキータからの展開が多かったけど、今年はほとんど使っていない。ほとんど台上のサーブिसに対してストンプから始めていた。それに去年は台についてアグレッシブだったのに、今年からは台から離れることも多かった。

優勝を決め、ベンチにもどり、GCと握手する水谷



水谷 ストップからの展開は自信があるけど、チキータは使っていないですね。Gボールに慣れていないし、チキータは練習もしていないので、練習していないことはやっぱりできないです。去年の全日本はたまたま使ったけど、もともとチキータは得意じゃないし、オリンピックでも使っていない。この全日本用に1カ月間でやることもできなかった。

大会中、探りながら試合をやっている感じなので、序盤の試合でストレートで勝っていても、自分としては4-2くらいの接戦の試合をしている、追い込まれている感覚だったんです。展開がつかめないし、点数の取り方もわからなかった。内容的に相当苦しかったけど、試合が終わってスコアを見ると4-0だったという感覚でした。

自分としては調子も良くないし、手応えもないから苦しい。初戦もそうだし、決勝もそう。でも点数は結構スコッている。6とか7とか8本でゲームを取っているのに競っている感覚がある。それだけ余裕がなかったんでしょうね。一番はボールですね。3年間ずっと紅双喜のボールでやってきて、それを1カ月間で新しいボールに対応するのは無理です。ボールがひとつに統一されなければたぶん負けていたでしょう。

ボールが変わったら用具も変えようかという考えにもなる。Gボールは硬いから何でも比較的良く感じるけど、その打球の感覚が自分でもわからなかった。

「オリンピックピックでメダルを獲ったから全日本は勝って当たり前という雰囲気は漂っていた。負けたら何言われるかわからないし、ただただ自分の力を証明しただけですよ、若手の挑戦をはねのけて」

吉村のチキータの威力、回転量とかスピードとか想像以上にすごかった

——決勝は吉村和弘(愛知工業大)選手、全く想像しなかった相手でしょ?

水谷 そうです。彼の試合は見えていなかった。5年くらい前にトップ12でやったことはあったけど。やってみて、チキータの威力、回転量とかスピードとか想像以上にすごかった。今まで受けてきたチキータの中でも彼の威力がすごかった。

1ゲーム目を落とすけど4本か5本はチキータでやられているから、とにかくチキータを封じなくてはいけない。それでも彼はチキータを打ってくる。だからそこでの駆け引きが最後まであった。

自分としてはフォア前からの展開にしたかったんで、フォア前とバックへのロングサーブを出すタイミング、かつバック前のサーブを混ぜたりとか、ずっとサーブの組み立てばかりを考えていました。

1ゲーム目に4種

類か5種類、多めにサーブをいろいろ出しました。ところが、どれを出してもチキータをされた。これはフォア前にサーブを集めたら全部やられるなと思った。

回転量とか変化じゃなくて、相手に「バックへロングサーブが来るぞ」と植え付けるのが最優先だと思いました。

吉村のサーブは縦回転系が多くて、日本人にしては珍しい。それは結構やりづらい。ほかの選手は横回転系が多いために、それまで縦回転を取っていなかった。吉村の縦回転系に角度を合わせるのが最初は大変でした。

吉村に対しては、「これはいけるな」という場面が最後までなかったですね。ずっと我慢するしかない。自分の卓球ができる気がしなかった。こっちは堅実なプレーをするだけだった。相手にチキータをさせないことと、レシーブをきっちり短く止めること、凡ミスをしないうとにかく粘る、それだけです。

——それは言い方を換えると、勝負に徹した戦い方ということかな。

水谷 そうですね。とにかく

我慢する。相手に何本良いボールを決められてもいいから、点数は自分が余計に取る。

——そうすると当然一気に点数を離すような展開にはならない。

水谷 相手より1本、2本、サーブミスが多いとか、凡ミスが少なかったほうが勝つという試合です。4-1であつてもむちゃくちゃ苦しかった。4ゲーム目、10-11とかでリードされている。このゲームは10-10でぼくがサーブミスした。ミドルから相手のフォア前に横回転を出そうとしたら短くなりすぎて、ネットミス。プレッシャーでしょうね。

あれで相手は「チャンス」と喜んだと思う。その瞬間、逆に「サーブミスしたことが良かった」と思いました。経験上、自分のそういう場面でのサーブミスは良い流れに変わることがあります。相手の油断を誘えるわけです。次に自分のサーブが来た時、プレッシャーに負けてサーブをミスするくらいなら相手の意表を突くサーブを出してやろうと心に余裕ができていました。

5ゲーム目の10-6になった時には勝てると思ったけれど、それまでは相手のサーブで2点取られるという不安は常にありました。

勝った瞬間ですか? 特に何もなかった。



THE CHAMPION'S INTERVIEW-1

JUN MIZUTANI



●みずたに・じゅん

1989年6月9日生まれ。静岡県磐田市出身。全日本選手権のバンビ・カップ・ホープスの各年代で優勝。ドイツ・ブンデスリーガでの卓球修行によってその才能を磨いた。09・13年世界選手権では、岸川聖也和組んだダブルスで銅メダルを獲得。全日本選手権では史上最年少の17歳7カ月で優勝し、平成28年度全日本選手権大会では史上最多の9度目の優勝を達成。14年ITTFワールドツアー・グランドファイナル優勝、16年リオ五輪では団体銀メダル、シングルスでは銅メダルを獲得した。世界ランキング4位(17年2月現在)

「無」ですね。今回は卓球関係者だけでなく、一般の人やメディアにも「オリンピックでメダルを獲ったから全日本は勝って当たり前」という雰囲気が出ていた。負けたら何言われるかわからないし、ただただ自分の力を証明しただけですよ、若手の挑戦をはねのけて。

「優勝して当たり前」という声があまりに大きすぎて、自分はその期待に応えただけ。それ以上でも、それ以下でもない

—— 今回の9度目の優勝は、今までの8回と比べてどういう優勝だろう。

水谷 感情としては今までが一番虚しいですね。

—— 虚しくはないでしょ？ 勝ったんだから。言葉を間違っていない？

水谷 本当にそうですよ。勝ちすぎたからそう思うんですよ。ある回数を超えると思うんですよ。

—— 今まで齋藤清さんや小山ちれさんと並んでいたけど、これで単独なんだから、うれしいんじゃないのかな？

水谷 もちろん9回の優勝を達成したことは誇りに思いますよ。積み上げてきたものは苦しいことばかりだったし、一生抜かれることもないと思います。達成感はあるけど、ただ今回の優勝だけを見たら……ひとりもナショナルチームのメンバーとやっていない。今回、世界ランキング50位以内の選手とひとりもやっていない全日本なんです。それに、周りの「優勝して当たり前」という声があまりに大きすぎ

て、自分はその期待に応えただけ。それ以上でも、それ以下でもない。

自分としては周りが喜んでくれるのがうれしいのに、今回は「おめでとう」というより、「お疲れ様」という感じなんです。

—— それは君しかわからない感情だな。

水谷 ぼくもこんなのは初めてですよ。今までは純粹にうれしかったのに、今回はあまりにも期待されすぎた。ぼくとしてはダークホース的な存在が好きなんです。

—— それは無理でしょ。今さら、ダークホースにはなれないでしょ。

水谷 そういうポジションだと勝った時にうれしい。

—— 他の選手に対して、「しっかりとしろよ」という気持ちがあったりする？

水谷 そんなことは全然ないです。周りが不甲斐なければ、ぼくが優勝できるじゃないですか(笑)。

—— 去年とか2年前の男子は、世界のトップランカーが勝ち上がって、そのぶつかり合いだったから、見ている「世界レベルの試合だ」と思ったけど、今大会はそれじゃなかった。

水谷 男子は少し若い選手が上に来ましたよね。ランカー(ベスト16)だったら若返ったイメージありますね。木造、坪井、緒方、



龍崎、とか。吉田(海偉)さんの後はぼくとか笠原、賢二ですから。

—— あと何回くらい優勝できるんだろ。
水谷 周りが停滞していたら、あと10回くらいいきますよ。

—— 決勝終わってすぐの場内でのインタビューで、「勝ったまま引退」とか言っていた？

水谷 「東京オリンピックで引退するか、あと多くて3回ですね。チャンピオンのままで引退したくないから、誰かほかから優勝を奪ってくれ」と言ったんですよ。それが新聞の記事とかは「チャンピオンのまま引退したい」

と間違っていた。この場で訂正してください。

—— それは本音なの？

水谷 とりあえず言っておこうかな(笑)。東京オリンピックで引退するかどうかは別として、チャンピオンのまま引退したくない。負けて、後輩に譲って、世代交代を見せつけられて引退、かな。「水谷さん今までお疲れ様でした。あとは俺に任せてください」って言う奴を見てみたい。

—— ベンチコーチには邱建新さんではなく、ドイツ時代の元チームメイトのGCが入った。

水谷 最初はひとりでもやるつもりだったけど、少し心細いなと思ったから、大会の1週間前にGCにお願いした。GCが「俺が力になるよ」と言ってきたけど、最初は「君はコーチの経験ないでしょ、卓球



THE CHAMPION'S INTERVIEW-1

JUN MIZUTANI





の戦術のことも知ってるの？」と断っていた。「もしGCが入って負けたら君のせいと言われるし、もし負けたら、やっぱり入らないほうが良かったかも」と考えてしまふ。

ただ、もし相手に「なんでGCが入っているんだ？」と聞かれたら、「おまえらに

うことは、世界ラン

キングで5位から10位の間に

にくるということです。そうならないと、中国にも勝てません。

——今回の全日本優勝は記録としては重要だけど、あまり君自身の中では記念すべき部分はなかったのかな。

水谷 まあ2017年の始めに少し寄り道して、帰ってきました、という感じ

「最多優勝記録は更新したけど、 ここが全日本のゴールではないですよ」

すね(笑)。

——今そんなに余裕のあるコメントしているけど、本当に準決勝の平野戦は負ける寸前だった。

水谷 あれは負けを覚悟したし、心の底からもう負けたと思いました。全日本で0-2の展開になったの最近の記憶の中では吉村(真晴)に負けた時かな。あとは田勢(邦史)さん、吉田海偉さんとやった時かな。今回、0-2の1-4だったから諦めている自分がいた。夢であってほしいと思っていたけど、タイムアウトを取られて現実にもどりました。

——試合後の平野選手の表情を見ると意外とさばさばして、「やるだけやりました」という感じで、悔しさを落ち込んでいる

様子はなかった。まだ本気で

水谷隼を倒そうとしていなかったの

かもしれない。そういう相手の気持ちの部分は試合が進んでいくとわかるものですよ。

水谷 相手は勝ちを意識したでしょうね。「これ勝っちゃうんじゃないかな」。そういう余分な感情が入ってきたのは間違いないでしょうね。序盤で相手は勝てるか

など思っていて、中盤からぼくが巻き返していった時に焦りが見えました。

——決勝の吉村選手の心理は見えなかったか。

水谷 やりづらい相手ではあります。得意なタイプではないです。競った時にやってくるプレーも予測できなかった。「それをミスしてくれるのはでかいぞ」というミスが多かった。

——オリンピックの後に勝って当たり前と思われていても、実際にはオリンピックの後にまともに練習していなかった期間が長かったし、大会前の1カ月間で調整していった。それでも全日本というタフな試合で勝てる。

水谷 練習もできていないし、他人より

練習はやっていない。でも自分なりにまあやっている。1日練習したのは数えるほどしかない。でも今回の1カ月間に関しては誰よりも身体を鍛えていた。継続的にジムでウエイトや走り込みをしてました。技術は忘れないけど、身体はやらないとダメです。身体は努力の賜物です。

最多優勝記録は更新したけど、ここが全日本のゴールではないですよ。初優勝した17歳の時、史上最年少記録だし、もしかしらば齋藤さんの8回を抜けるかもしれないと考えていた。ぼくはこれからさらに優勝を重ねて、若くして誰かが優勝したとしても抜けるなんて到底思えない、そんな記録を作っていきたいですね。

リオ五輪メダリストというインパクトが大きすぎたために、史上最多の9回優勝という大記録が薄くなったのかもしれない。水谷自身が更新していく通過点としての記録でもある。

水谷に食いつかるべき選手たちが脱落し、彼は孤高の道を歩き、9度目の頂点に立った。全日本選手権が注目され、熱い視線が注がれる中、王者は孤独を感じ、強力なライバルの出現を待っている。

「水谷時代」はどこまで続くのだろうか。その時代の幕を引く選手はいまだ見えない。記録を塗り替える喜びよりも、自分を脅かす相手とのエキサイティングなゲームを、この王者は待っているはずだ。

(文中敬称略)

丸ごと1冊、水谷隼

卓球王国 2月号 別冊

水谷隼

全国の書店、卓球ショップで
発売中!



カラー106ページ
1,080円(税込)

ロングインタビュー・究極の技術紹介
素顔のメダリスト・リオ五輪での戦い
水谷隼物語&名言集



「卓球界の歴史を変えた男」
メダリストの真実。
一冊に込められた
水谷隼のすべて

全国の書店・卓球専門店・スポーツショップでお求め、お取り寄せください。(一部取り扱っていないお店もあります)
お店の人には「別冊 水谷隼」とお伝えください

© 小社へお申し込みの場合は、229ページをご覧ください

株卓球王国 TEL 03-5365-1771 FAX 03-5365-1770

MIU HIRANO

THE CHAMPION'S INTERVIEW-2

[チャンピオンインタビュー]

平野美宇

●JOCエリートアカデミー／大原学園



「東京オリンピックまでに
自分が絶対日本の一番になりたい、
そのためには今回チャンピオンに
なるしかないと思ってました」

圧巻の決勝だった。
平野美宇は女王・石川佳純をラブオールからゲームセットまで攻め続けた。
一度として攻めを緩めるでもなく、フルスイングの強打で世界のトップランカーに襲いかかった。
高校1年生、16歳9カ月という史上最年少での優勝。
センセーショナルな衝撃とともに日本の頂点に立った平野美宇のインタビューは
激しいプレーと裏腹に自然体での本音がおもしろい。

聞き手=今野昇(本誌編集長)
interview by Noboru Konno

写真=中川学&奈良武
photographs by Manabu Nakagawa & Takeshi Nara

攻撃選手が来ると予想して
いたから、あまりカット打ちは
練習してなかった。
だから準決勝は不安でしたね

それは日本女子のレベルの高さを見せ
つけるような決勝だった。17年1月時点
での世界ランキング5位の石川佳純と同
9位の平野美宇との決勝。激しい打ち合
いを制したのは16歳の平野。若きプリン
セスが新女王として戴冠した瞬間だった。

あれから1週間経ち、休養を取る間も
なく、取材が途切れなく続く平野。11月
のインタビュから2カ月経った。日本
の頂点に立つてもなお、平野美宇の自然
体の語りは変わらなかった。

——優勝おめでとうございます。全日本
が終わってちょうど1週間経ちました。

平野 ありがとうございます。優勝して
なかったら次の日から練習をしたと思
いますけど、優勝して取材もあったし、学
校のテストもあったので、練習はしてい
けど休めていません。自分へのご褒美
で買い物もしたかったのに、できていな
いです。

——優勝した実感はある？

平野 優勝した日はなかったんですけど、
次の日とかLINEがたくさん来ていて、
それを見たら実感が湧きました。

——普段はLINEとか見ないのに(笑)。

平野 そうなんです(笑)。普段は
LINEをする人はひとりもいないし、
事務的な連絡とか本当に仲の良い子だけ
なんですけど、今回はLINEがすごく忙

しくて、小学校の同級生が4年ぶりに
LINEしてきたりとか。ただ、今は多
いけど、たぶん1カ月くらい経つとゼロ
になると思っています(笑)。

——大会前の調子はどうだったんだろう。

平野 普通でした。良くもなく悪くも
なくという感じでしたが、直前の3日前
くらいから調子が上がっていきま
した。

——1カ月前からはどういう感じで全日
本に向かっていたんだろう。

平野 特に今回はバタフライのGボール
に気をつけました。普段打っている紅双
喜のプラスチックボールと全然違ったの
で、回転とかスピードは紅双喜のほうが
かかります。自分はどちらかというと回
転で勝負するタイプですが、(Gボールで
は)スピードで勝負しようと考え、怖さの
出るボールを練習しました。

——今回はシングルスだけに種目を絞
りました。

平野 最初はまだ優勝したことのない
ジュニアに出ようと思ったんですけど、
今回は一般で優勝する実力もあったし、
それを狙おうと思ったので一般だけに絞
りました。

——プレッシャーはなかった？

平野 なかったですね。ワールドカップ
で優勝したあとの全日本だったし、去年
2位なので、決勝以外は相
手が向かってくると



THE CHAMPION'S
INTERVIEW-2

MIU
HIRANO



2年連続の石川佳純との決勝。平野は果敢に攻め続けた

いうことじゃないですか。最初はそれを少し心配したけど、実際にやってみたらプレッシャーは全然感じないで向かっていったので、それに関係なくプレーできたのが良かったですね。

——最初の試合（4回戦）は河村（茉依・アスモ）選手だった。

平野 初戦では今までの全日本の中でも一番良い試合ができたと思います。特にメンタルですね。全日本のスーパースターの初戦（4回戦）はいきなり強い相手があるので、初戦で負ける可能性があるけど、そこで良い試合ができたので勢いに乗れました。

——次の5回戦は阿部（恵・サンリツ）選手。

平野 阿部さんはやりにくい相手です。全く気が抜けないと思っていました、対策もすっかり立てていたので、ストレートで勝てたのは良かった。

——その5回戦で平野さんのブロックにいた伊藤（美誠・スターツSC）選手、早田（ひな・希望が丘高）選手が負けるという波乱が起きています。

平野 美誠ちゃんかひなちゃんのどちらかが上がってくると予想していました。特に二人ともカット打ちがうまいので、どちらかが上がってくると思っていました。そうしたら準々決勝でカット同士だったから驚きました。攻撃選手が来ると予想していたから、あまりカット打ちは練習してなかった。だから準決勝（橋本戦）は不安でしたね。

（伊藤・早田の二人が負けて）動揺はしなかったけど、全日本は厳しいんだなと

改めて思いました。

——6回戦で前田（美優・日本生命）選手もストレートで下していき

ます。

平野 加藤（美優・吉祥寺卓球倶楽部）さんが来ることも予想していたけど、阿部さんと当たるから左（サウスポー）の表（ソフト・バック面）の対策をもととしていたので、すごく良い試合ができて、この試合が全日本の中で一番良い試合でした。この辺から「これは優勝できるかな」と思いました。準々決勝に行くまでにオールストレート勝ちはなかなかないので、調子がすごく良かった。

——次の準々決勝は松澤（茉里奈・十六銀行）選手でした。全日本でよく当たる相手だね。

平野 松澤さんとは3年連続全日本で当たっていて、いつも競り合いになっているので簡単には勝たせてもらえないと思ってました。同じタイプの卓球なので競るのかもしれないですね。初戦から順調にストレートで勝っていて、いきなり準々決勝で競ること少し焦りはあったんですけど、もともと競り合いになると準備していたのが良かったと思います。

——準決勝はカットの橋本（帆乃香・四天王寺高）選手でした。

平野 ストレートで勝ちましたね。最初は攻撃選手が上がってくると思ったから



びっくりでしたが、すごく良い試合ができて自信になりました。

松澤さんに勝った後に、その日と次の日の朝にカット打ちの練習をしたくらいなので、この勝利は自分の自信になりました。

橋本さんは去年のジュニアで負けた相手だったので、決勝のつもりでやってました。準決勝が勝負だと思ってました。自分の実力が上がって勝てた試合だと思います。最後まで気は抜けなかった。

1年前の決勝では、「決勝に来れた。石川さんとできるんだ」と満足している自分がいたんですが、今回は「絶対に勝ってやる」という気持ちでした

昨年は同級生で五輪代表の伊藤美誠に勝つなど、いきなり決勝に進み、注目を浴びた平野美宇。しかし、直後の16年世界選手権の団体戦メンバーには選ばれず、夏のリオ五輪はリザーブとなり、現地で裏方として選手たちをサポートした。

その後、ワールドカップで優勝するなど、彼女にとって16年は激動の年だった。そして迎えた17年1月の全日本選手権。1年間のいろいろな思いを込めつつ、平野は爆発した。準決勝までの快進撃では文句なしの強さを見せつけ、決勝は昨年同様に女王・石川佳純と対峙した。

——準決勝から決勝まで時間が空きます。どのように過ごしていたんだろう。

平野 普通どおり、練習場で練習したり、寝たり、食べたり、本当にいつもどおりです。練習相手は張（成・NTCスタッフ）さんがやってくれました。張さんは技術面や作戦面でもいろいろ教えてくれて、張さんがいなかったら今回の優勝もなかった。

——1年前の決勝と今回の決勝では、どこが違っていったんだろう。

平野 気持ちですね。1年前の決勝では、「決勝に来れた。石川さんとできるんだ」と満足している自分がいたんですが、今回は「絶対に勝ってやる」という気持ちでした。

——決勝のコートに入る時の心理状態はどうでした？ いろいろ考えてしまうのでしょうか？

平野 決勝って違いますよね。みんなが決勝しか見ていないわけだから、「決勝だ

「『おっとりしている』とよく言われますけど、実際におっとりだけだったら強くはならない、トップには絶対行けないんじゃないかな」

から」といきなりハードルが上がっている感じが、それは気にせずに自分の良いプレーをしようという気持ちで入っていきました。

決勝の空気は去年と同じでしたけど、自分自身は全く違いました。今年は「決勝で絶対勝つんだ」という気持ちでした。

——それを聞いただけでも、気持ちの強さがヒシヒシと伝わるね。普段「おっとり」にしか見えないのに。

平野 「おっとりしている」とよく言われますけど、実際におっとりだけだったら強くはならない、トップには絶対行けないんじゃないかな。いつもホワホワしていたらトップにはなれない。だから二重人格でないとトップにはなれない。だからそういう二つの面があるのは良いことだと思います。私にも良い意味で、表と裏はあると思います。

——決勝は1ゲーム目からダッシュをかけたね。

平野 いきなり1ゲーム目に4-0になったのはすごく大きかった。去年は逆に0-4でリードされて、何連覇もしている人いきなり0-4じゃ絶対勝てないという反省があったので、今年はその反省を生かした。

——今年の石川さんは去年と違うという感じはなかったか？

平野 去年は石川さんも私が決勝まで上がってくるとは予想していなかったと思うから、対策はしていないでしょうけど、今年が私に来ることを予想して対策はしていたと思います。去年の石川さんは試合をやりながら探っている感じがありません。

したが、今年は作戦が最初から決まっていた感じがした。

——平野さんはこの1年間でさらに卓球が速くなり、パワフルになっていましたか、勝因は何だと思いますか？

平野 常に自分が主導権を握っていたと思うので、それが勝った原因です。1ゲーム目を取った時には自分がやることに集中していたし、自分が押していたので今のやり方をやっていけば勝てると思ってました。2ゲーム目もジュースで取ったのが大きいです。「これはいける」と思っすぎてダメだけど、2ゲーム目には「これは自分のほうが押しているな」と思っていました。

——2-0でゲームをリードして、3ゲーム目は落とし、流れは石川さんに傾きそうだった。

平野 普通の相手だったらそのまま勝てると思うけど、石川さんは「作戦を変えてくるのはさすがだな、違うな」と思いました。2-1の後の4ゲーム目を取り返したのは大きかった。11-9で点数も競っていたので大きな意味のあるゲームでした。

——決勝の戦術というのは試合の中でも何度か変えていたんだろうか。

平野 そんなに変えていないです。常に自分が主導権を握っていたので、それに対して相手を変えてくることはあっても私はそれほど

れほど変えていなかった。

——3-1にした5ゲーム目には8-2から逆転された。

平野 リードした時に優勝がちらついてしまいました。「優勝したら何をしようか」と考えたら、そのスキに一気に追いつかれてしまった。

——あの5ゲーム目の石川さんの逆転を見たら、ここから石川さんは巻き返してくるんだなと思いました。それを逆に6ゲーム目にはね返した。

平野 自分のプレーは悪くなかったのですが（ゲームを落としたのは）たまたまかなと思えました。気持ちを切り替えて頑張ろうと思えました。

——6ゲーム目は最初からリードを奪い、一歩一歩優勝に近づいていく展開でした。

平野 絶対優勝とか考えちゃダメだと言いかせました。逃げて勝てる相手じゃないから、ひたすら「逃げるな、逃げるな」と思っていたし、マッチポイントを取った時も「逃げるな」と思いつつ。5ゲーム目でリードした時には、「優勝したら、この後、取材が忙しいな」とか考えてしまった（笑）。それで逆転されたから、6ゲーム目では最後の1本まで優勝は考えなかった。

——実際に、優勝を決めた瞬間はどうだったか？

平野 1月からずっと、「優勝

勝、優勝」と考えていて、初戦で負ける夢を見たり、他の夢も怖いものばかり見ている。普段は夢を見ないんですよ。1月に入ってから変な夢ばかり見ていたし、試合で負けた夢が目がさめることもあった。その1週間後には優勝した夢を見て、「わあ、優勝したんだ。うれしいー」というところで目がさめて、「なんだ、夢だったんだ」と思いました。「優勝、優勝」と思っすぎていたのかもしれない。それくらい優勝したかったです。

もしリオのオリンピックのことがなかったら、「優勝したい」とか、「優勝できたらいいかな」という感じで終わってますね

——普通に考えて、やはり石川さんが大本命で、平野さんは去年決勝に行ったとは言え、ワールドカップで優勝したとは言え、「まだ平野美宇が優勝するのは早いかも」という思いもありました。でも実際には優勝したいというエネルギーがとても大きいよね。それは去年決勝で負けたからそう思ったのか、それともワールドカップで優勝してからそう思うようになったのか。

平野 去年のことは関係ないです。今年史上最年少優勝ということもありましたし、リオ五輪に行っただけで、試合には出られなかったし、東京オリンピックまでに自分が絶対日本の一番になりたい、そのためには今回チャンピオンになるしかないと思ってました。

——夢とか目標として全日本優勝があつ



THE CHAMPION'S INTERVIEW-2

MIU HIRANO

「本当にこれから中国選手に勝ちたいですね。たまには勝っても、差はある。たまたま勝つんじゃないで、勝つても普通と思われるような選手になりたい」



●ひらの・みう

2000年4月14日、静岡県沼津市生まれ、2歳から山梨県中央市で育つ。ともに筑波大卓球部出身の父・光正、母・真理子の影響で、3歳5カ月で卓球を始める。母が指導する「平野英才教育研究センター卓球研究部（平野卓研）」で腕を磨き、小学1年生で全日本バンビ優勝、3年生でカブ優勝、2016年ワールドツアー・ポーランドオープン優勝。16年10月には女子ワールドカップ優勝を飾り、17年1月の全日本選手権で史上最年少の16歳で初優勝を達成。世界ランキング9位（17年2月現在）

でも、まだ若いし、今回優勝できなくても不思議ではない。チャンスはまだあるわけだから。何か強いきっかけがないと、「絶対優勝する」とは思えないような気がする。

平野 リオのオリンピックに出られなかったことは大きかった。かなり悔しかったし、絶対自分が一番で東京オリンピックに出たいと思いました。もしリオのオリンピックのことがなかったら、「優勝したい」とか、「優勝できたらいいかな」という感じで終わってますね。

—— リオ五輪にリザーブとして行けたことも大きいし、行って3人がメダルを獲たのを見たのも大きいのかな。

平野 大きいですね。行って良かったと思います。でも、行った直後は「早く帰りたい」と思いました。正直、リザーブで行くよりは5番とかで落ちていたほうが良かったと思います。

ただオリンピックの終わりのほうにも感じたんですけど、今になってみればやっぱり「行かせてもらって本当にありがたかった」と感謝しています。

—— 平野さんにとって、福原さん、石川さんというのはどういう存在なのだろう。

平野 小さい頃はテレビで見たり、会場の上から見ていたのが石川さんや福原さんの試合であったり、決勝だったりした。憧れであったり、雲の上の人でしたが、今は自分がその立場にいるから超えなければいけないと思っています。

—— 自分が見る「平野美宇」という選手は何が優れているのだろう。

平野 優れているところ……努力できる、頑張れるところかな。

——天才だと思う？

平野 あんまり……。 (才能は) 中の上……。かな。才能だけの選手じゃないと思う。小さい頃、成績が出ていたのは練習をやっていたからであって、そこから伸びるのって大変だし、小さい頃は才能だけでも勝てるかもしれないけど、そこから伸びるのは努力がないと無理だと思う。

——福原さんも小さい頃から卓球を始めて、「天才少女」と言われていたけど、決して天才じゃない。運動能力も決して高くないけど、あれほど活躍したのは努力だと思う。平野さんも福原さんも、小さい頃から卓球を始めてチャンピオンになるのは珍しいケースで、子どもの時のチャンピオンというのはほとんどが消えていくことが多い。

平野 そうですよ。私もよく「バンビで優勝した人は将来消えるから、気をつけな」と直接言われていて、そんなジンクスはくつがえしてやると頑張っていました。「勝手に言ってるだけ、絶対そう言った人を見返してやる」と思っていました。

——1年前の全日本の時もモデルチェンジをした「ニュー平野美宇」で戦っていたけど、今回はさらにそれがスピードアップ、パワーアップして驚いた。プレースタイルというのは、その選手の性格や身体特性とかが出るものだから、そんなに簡単に変わるものじゃないと思うけど。

平野 確かにそうですね。性格とか出ますよね。——逆の言い方をすると、プレースタイルを変えることは性格を変えるようなもの

佐藤利香の17歳1カ月を破る史上最年少の優勝記録を打ち立てた平野美宇

のかもしれない。

平野 私の性格も変わったかもしれない。自分で自分の性格を変えようと思いました。たとえば、今までは仲の良い人としかしやべらないし、苦手な人とは絶対しゃべらないタイプだった。

コーチに「性格の狭さは戦術の狭さでもある」と言われて、心を狭くするのはなく、心を広くするためにいろんな人としてやべるようにしました。そうしたら試合中でも「自分はいろんな人としゃべってきたから大丈夫」と自信が持てて、心を広くしたら戦術も広くなった気がします。苦手な人であっても話をすれば得るものが多いし、仲の良い人や得意な人とばかり話をしてても、視野が狭くなって戦術も狭くなる気がしました。

仲の良い人には普通に話をするけど、それ以外の人には今までは自分を作った話をしてました。良いふうに自分を思ってもらいたいから、自分を作っていた。良いふうに使われたいもうひとりの自分があるんですよ。本当の自分じゃないんです、それは。

だから、それをやめました。みんなに対して同じように話をしようと思いました。それからすごく明るくなったというか、楽になったし、卓球も積極的になった気がします。

——もともとはどちらの平

野美宇が本当のあなたなんだろう。自然体でいるのが平野美宇なのか、自分を作っていくのが平野美宇なのか。

平野 もともとは普通なんです。気にならなくなったくらいから、他人から良いふうに使われたと思うようになっていました。好感度を気にしていたのかな。今は気にせずに話しています。

——これからはチャンピオンになったことが重圧になるのかな。

平野 今はまだわかりません。今年もワールドカップ優勝者として臨んで、去年より相手から向かってこられたと思う。卓球王国にも大会前に「去年2位になっているので、今年の問題は精神面だ」と書かれていて、そうふうに見られてるんだ、絶対優勝してやると思いました。

——家族の存在って何だろう。

平野 小さい頃から支えてくれてますね。妹たちも、私が海外の試合に行ってお母さんがついてきた時にはお留守番をしてくれたりとか、大変なこともあったと思うし、お姉ちゃん(自分)と比較されたりとか、大変なことがあったのに応援してくれているし、ありがたいと思っています。

**世界選手権は
シングルスではメダル獲得、
ダブルスでは金メダルを狙いたい**

2月の最新の世界ランキングでは石川が3位、伊藤が7位、平野が9位と、トップ10の中に3人もの日本選手が入って



THE CHAMPION'S INTERVIEW-2

MIU HIRANO

る。日本女子のレベルの高さを示すと同時に、それは20年の東京五輪に向けての熾烈な国内競争が待ち受けていることを意味している。これからの世界選手権やワールドツアーがより重要なものになってくるだろう。

——全日本チャンピオンとして向かっていく世界選手権が5月にあります。

平野 世界の人には全日本チャンピオンは関係ないけど、世界からはワールドカップチャンピオンとして見られて、来年の全日本ではチャンピオンとして見られる。世界選手権はシングルスではメダル獲得、ダブルスでは金メダルを狙いたい。

——ダブルスは石川さんと組みます。

平野 石川さんとは初めて組みます。左(利き)の人と組んだことがないんですよ。

——今回チャンピオンになったけど、東京オリンピックまでは3年あります。

平野 まず世界ランキング5位以内にして、日本での選考がいらなくらいまで上に行きたい。みんなが国内で競っている時に、私は中国選手と競るような選手になりたい。

——今自分が練習の中で大切にしているものって何だろう。

平野 動きの速さ、

回り込み。回り込みができて

なくとも全日本チャンピオンにはなれるけど、回り込みが良くなるとは世界チャンピオンにはなれないから。中国選手で回り込みのできない人はいない。あとは、いろいろありますけど、今回良い卓球ができたので、この卓球をすれば中国に勝つことも難しくないんじゃないかな。

——前回のインタビュの時に「劉詩雯が目標」と言っていたけど、今回記者席から見ていたら、劉詩雯のように見えただけ。

平野 ですよ。

——否定しないね(笑)。

平野 自分でも思いました(笑)。劉詩雯に見えました? うれしいな。今回は自分でも何か中国選手っぽいなと思いました。本当にこれから中国選手に勝ちたいですね。たまには勝っても、差はある。たまたま勝つんじゃないかって、勝つても普通と思われようかな選手になりたい。

——最後は名言で締めてください。(笑)

平野 今日はあまり言っていないですね(笑)。東京オリンピックは日本のエースとして臨みたい。中国と対等に戦えるような選手になって、中国選手を倒して金メダルを獲りたい。

——自分の完成形が1000だとしたら、今回優勝した平野美宇はどのくらいだろう?

平野 わかんないけど、50くらいじゃないですか。

——ということはまだ半分?

平野 はい。だって、中国選手は超強いですよ。

——今回の優勝で少し近づいた感じもあるでしょ?

平野 朱雨玲にはチャンスはあるけど、丁寧や劉詩雯にはまだですね。世界選手権で当たりたいですね。超級で試合した時に「ちよつと違うな」と思いました。朱雨玲、陳夢、木子と五輪代表の丁寧、劉詩雯では卓球の技術、戦術、そしてメンタルが違う。

——世界選手権のシングルスに出るのは……。

平野 2回目ですね。2年前の蘇州大会に出て、丁寧に負けて16とか32くらいだった。中国選手に勝ちたいです。勝ちます。前回「日本のエースになりたい」とインタ

ビュの中で言ったら、「なりたい」は弱いと言われました。

「なりたい」ではなく「なる」にしなければいけないと言われました。

——今回は?

平野 私は世界チャンピオンになる。

——おお!!

平野 でもいきなりの世界チャンピオンは、ちよつと遠いです(笑)。「私は中国選手に勝つ」にします。

そして2020年の東京オリンピックで団体とシングルスで金メダル。「金メダルを獲りたい」ではダメですね。「金メダルを獲る」。

今回も「優勝したい、優勝したい」と言っていたんですけど、1週間前からは「優勝する」「優勝する」と言い続けていました。優勝したいと言っても誰も獲らせてくれないから、獲るのは自分だから「優勝する」。だから東京オリンピックの代表になる、そして金メダルを獲ります。

——締めの言葉いただきました。ありがとうございました。

平野美宇は何とも言えない雰囲気を出す選手だ。自然体でありながら、発する言葉には、時に力強さと16歳の可憐な少女の幼さが同居している。

彼女のぶれないもの。それは東京五輪で頂点に立つという並々ならぬ強い意思。この少女は侮れない。未知のポテンシャルを持つモンスターかもしれない。 (文中敬称略)

「優勝したいと言っても誰も獲らせてくれないから、獲るのは自分だから『優勝する』。だから東京オリンピックの代表になる、そして金メダルを獲ります」